

源氏物語爪印 若菜巻

村 井 利 彦

(上)

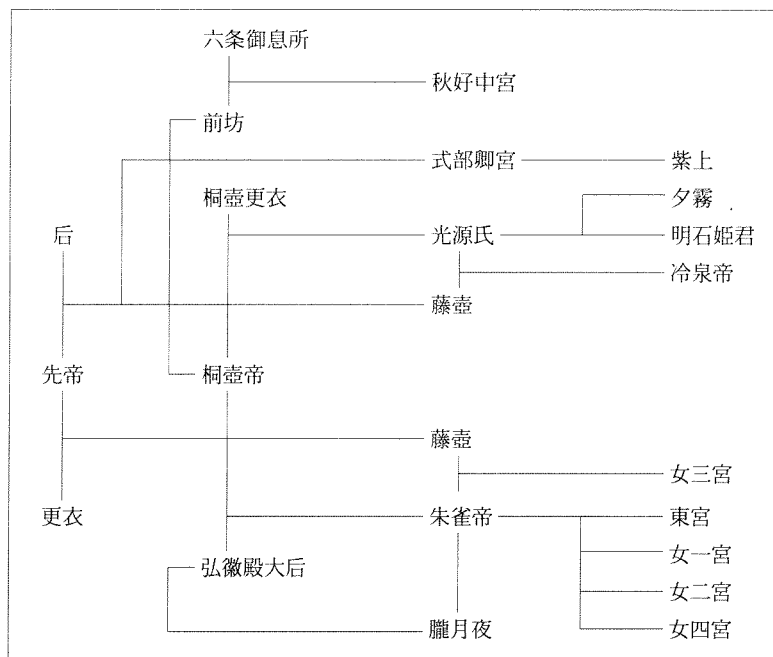
【1】朱雀院の出家意識より、巨大な若菜巻は始まる。光源氏の出家意識は、すでに前巻に描かれていた。⇒藤裏葉巻【41】。どちらが先に思いを遂げられるか。

【2】弘徽殿太后の死が想像される(11)。彼女の消息の最後は、初音巻巻末の、男踏歌が朱雀院の后宫を廻ったという小さな記事である。あれが、彼女の花道であったのか。我々には、少女巻の、彼女らしい愚痴の印象が強い。桐壺一族と対決し、ついに敗北しきった無念の思いを抱いたまま、この世を去ったものとみえる。母思いの朱雀院に、この母の悲しい生涯が、回復しがたい暗い影を落とす。その影の暗さは、この巻でもっと暗くなる。ともかく、彼女の死は、光源氏の一つ前の時代の終わりである。ということは、次に来る終わりは、光源氏の世代ということになる。彼はすでに四十歳の声をきこうという時であり、世代交代の波は確実に彼の足元に及んでいる。⇒藤袴巻。しかしながら、平安時代という時代は、摂関体制であったから、天皇の外祖父となった時に我が世の春を迎える。明石姫君は前巻で入内したばかり。これからが光源氏の政治的頂点ということになる。はたして、光源氏は、頂点と彼自身の人生の終わりを結合することができるのだろうか。

【3】朱雀院の「御子たち」。東宮と女宮四人。男宮は一人しか出来なかったのである。したがって、朱雀院にとって、東宮の保全是絶対のものであったと予想される。かつての光源氏と藤壺のように。これからとることになる朱雀院の行為の底には、彼の東宮を守る意識があることを押さえておこう。

【4】「藤壺と聞こえしは、先帝の源氏」(11)。これは、われわれの意識を桐壺巻に一挙に立ち返らせる言葉である。われわれに馴染みの藤壺は、「先帝の四の宮」であった。⇒桐壺巻。系図を示せば、以下のようになるだろうか。今の藤壺が、前の藤壺と対照関係になり、光源氏系と朱雀院系の両統の血脈が鮮やかに表示されて

いるところ、世代の構成に注目しよう。それに、先帝が案外に最近の人であることもこうして見るとよく分かる。



【5】今の藤壺の説明。「まだ坊と聞こえさせし時参りたまひて、高き位にもさだまりたまふべかりし人」であった。なのに、「取り立てたる後見もおはせず」という事態になっていた。これはおそらく、先帝が崩御されたためか、あるいは政変のためだろう。彼女の「母方もその筋となくはかなき更衣腹にてもおしたまひければ、御まじらひのほども心細げにて」という状態は、彼女が死ぬまで変わらなかつたらしい。彼女は、帝の偏愛を一身に集めた朧月夜の陰で泣きつづけ「世の中を恨みたるやうにて」生涯を終えたわけである。ここで注意されるのは、今の藤壺が、昔の藤壺に似ていなくて、むしろ、光源氏の母・桐壺更衣に似ているという点である。今の藤壺の、その母更衣もまた桐壺更衣の人物であるという設定もまた、この傾向に追い打ちをかけている。そしてまた、光源氏の復活の日以来、悲遇をかこった朱雀院の母・弘徽殿太后の面影も、そこはかとなく宿していることが分かる。坊の時から云々、二番目に愛される運命への呪い。これは、現役時代の弘徽殿太后そのものではないか。朱雀院がこの藤壺の遺児・女三宮にこだわるのも、理由のないことではない。朱雀院にとってみれば、母のような人が生んだ皇女が可愛いかったのであり、光源氏の心理に則して言えば、女三宮に

おける桐壺更衣の側面に心が動いたものと想像される。

【6】女三宮は、母方からして正統な源氏である。したがって、彼女を主人公とする物語は、藤壺や紫上をそうするように、まじりけなしの源氏物語なのである。このことも、先ず確認しておくのではないかな。

【7】「先帝の源氏」というテーマで論文がかけられるのではないかな。『源氏物語』前史、あるいは『源氏物語』裏面史に関する論文である。光源氏とて、時が経てば「先帝の源氏」と呼ばれるはずではないかな。今とて、現にそうである。

【8】この時点での女三宮の年齢は十三四。紫上の登場時と同じである。ちなみに光源氏との年齢差、二十五六。一世代の差である。光源氏は、今やかつての六条御息所の立場にある。

【9】「西山なる御寺」(12)は、仁和寺のことか。嵯峨帝や宇多上皇のイメージである。

【10】朱雀院は、大事な遺産はいうまでもなく、由緒のある品々は、すべて女三宮のために残した(12～3)。このあたり、ありし日の常陸宮が末摘花にそうした事情を想起させる展開である。

【11】女三宮の裳着の準備。梅枝巻に描かれた明石姫君の盛儀と比較して理解すべき展開であろう。

【12】東宮の見舞い。母の承香殿女御の同道。この幸せそうな母子の姿が女三宮の悲運を際立たせる。しかし、承香殿女御とて、朧月夜の陰で泣いた女三宮の母・藤壺と同じ過去をもっている。しかし、今、東宮の母女御という地位で救われているのみである。朱雀院は、東宮に「世をたもちたまはむ御心づかひ」(13)を教えたとある。東宮の地位の不安を考慮にいと、意味深長である。⇒【3】。光源氏のいうことをよく聞け、とでも言ったか。

【13】「女は心よりほかに、あはあはしく、人におとしめらるる宿世あるなむ、いとくちをしく悲しき」(14)。これは、女三宮の運命の予告だろう。後の宇治八宮の訓戒などが思い出される。

【14】承香殿女御の人生が、明石御方のような人生であったことをうかがわせる記述がある(14)。彼女は、藤壺に耐え、朧月夜に耐えて今日の地位を得たのである。男宮を生んだのが彼女一人であったというのが彼女の運の強さ。その彼女が、女三宮を頼むという朱雀院の申し出に、気乗りがしないのも人情の自然だろう。まず、女三宮は、東宮母子で躰く。これがケチのつきはじめである。失敗は失敗を呼ぶ。

【15】年末の段階では、朱雀院の病状は末期的で、いまにも死にそうな記述である。死を前提に物語が展開されている。それにもかかわらず、本文において、肝心の死がなかなか実現しない。死をもって解決し、事を水に流す物語を書きたくないという作者の意思を了すべきであろう。

- 【16】見舞いに来た中納言・夕霧に、桐壺帝の遺言を語る朱雀院。賢木巻の復習である。光源氏の見舞いが近々予想される（15）ことであるから、朱雀院の言葉は、夕霧にということより、伝えられるであろう光源氏へのメッセージとしての色彩が強い。その内容は、宇多上皇が醍醐帝に与えた遺言にきわめて近い。意識的な操作であろうか。だとすれば、光源氏は菅原道真の見果てぬ夢を現実化した男だと、心得て読めということになる。⇒賢木【24】。
- 【17】朱雀院の悔恨。光源氏を須磨・明石にやったこと。きっとこの仕返しを被ると覚悟していたが、光源氏は「つひに忍び過ぐし」た。そのうえ「春宮などにも心を寄せ」てくれた。ありがたいことだ。しかし、この論理展開から、逆に、光源氏の仕返しの図式が透けて見える。廃太子、である。もっとも、明石姫君を東宮に出入させている今の段階では、廃太子は思ひのほかであるけれども。話は飛躍するが、六条御息所の夫・前坊は、廃太子という運命に翻弄された人ではなかったか。また、近い例でいえば、宇治八宮である。彼は、東宮になりそこなっばかりか、今、廃太子の運命を現実に生きているのである。
- 【18】冷泉院即位は、確かに朱雀院本人が強調するとおり、朱雀院の功績である。母・弘徽殿大后の意思を無視した朱雀院の決断であった。この決断と引き換えに、現東宮の保全があったというのも冷たい事実であろう。彼は、この時、母の呪縛から脱出し、独立して政治を行ったのだともいえる。朱雀院がそれを意識しているかどうかは別にして。
- 【19】朱雀院が光源氏の訪問を、あらためて夕霧に要請した（16）のは、初めから女三宮を光源氏と結婚させる意思があったことを想像させる。彼の心理に則していえば、これは、朱雀院の光源氏に対する感謝のしるし以外なものでもない。朱雀院は、その他大勢の候補者を振り切り、誰もが願う女三宮を、彼の意思で光源氏に与えたのである。明石・落標以来の「政治」であろう。これは、全くもって朱雀院の善意から発したものである。しかし、善意ほど始末におえないものはないということを、朱雀院は意識していない。善意の人の善意の人たる所以である。
- 【20】夕霧が、光源氏と朱雀院との間で起こった事件の内容について知らぬのは当然である。おどろおどろしい真相を知るには、夕霧はまだ子供であったし、その後彼が得た知識は、あくまで光源氏によって整理修整された知識にすぎない。したがって、夕霧がのべた言葉は、綺麗事の見本である。かって光源氏にも、この夕霧のような時代があった。明石入道に出会う前までは。
- 【21】夕霧の年齢。「二十にもまだわづかなるほど」（18）。女三宮の相手として恰好である。「太政大臣のわたりに、今は住みつかれたりとな」と言って、朱雀院がこの件を諦めるのは、太政大臣の権力を憚ってのこととみえる。気の弱い朱雀院らしい決断である。しかし、少なくとも、女三宮は皇女であるから、結婚する

なら正妻でなくてはおさまりがつかぬ。という事実はここで確認される。朝顔の時が思い起こされる。朝顔の父・式部卿、及び五宮は、葵上がいるかぎり、朝顔と光源氏との結婚をためらっていた。六条御息所は、葵上を取り殺して、葵上がいる正妻の座をもぎ取ろうとした。上の上の発想とはそういうものである。紫上の問題が、どうやらこのあたりで、正面きって語られそうな予感があるではないか。

【22】夕霧の末練（18）。女三宮クラスの女性との結婚がいかに魅力的なものかを示している。財力の故か。それとも名誉。

【23】若い女房が、夕霧を見て賛嘆すると、「老ひしらへる」女房が、光源氏の若い頃は、こんなのメじゃないほどだったとやる。源氏物語の語り部の視座はまさしくこれである。しかし、若い頃は、という発想そのものが、光源氏の現在の老いを明示している。

【24】朱雀院の光源氏評（19～20）。手放しの礼讃である。「今はまたその世にもねびまきりて、光るとはこれを言うべきにや」（19）。現在の光源氏が、この批評に耐えられるか。いささか心配になるほどの礼讃ぶりである。朱雀院は、光源氏の無邪気なファンなのだ。かつての左大臣のように。

【25】朱雀院の解説（20）を待つまでもなく、まだ二十歳にもならぬ夕霧の中納言は、出世が早すぎる。光源氏が参議で大将を兼任したのが二十一歳。参議は中納言の下である。世も末の意識か。もっとも、夕霧は当初、屈辱の六位から出発した。⇒少女巻。なのに現在、この高位にある。ということは以後光源氏が、急激強引に引き上げたことを意味する。身内を厚く遇する光源氏の政治の一面であろう。そのあたりの批判、朱雀院の意識にはないが、読者の意識には、刺激的要因となろう。伊周を引き上げた道隆の、近い事例を想像するからである。この想像は、悲劇の予感に違いなからう。

【26】「六条の大殿の、式部卿の女生ほしたてけむやうに、この宮をあづかりはぐくまむ人もがな」（20）。朱雀院の願望。乳母に向かって言った本音であろう。「人」は明らかに「六条の大殿」。もし、これが現実のものとなったら、光源氏はもう一度人生のやり直しを強いられることになる。出家しようかと思っている光源氏には、この話、無理な相談というものだ。善意の人の考えることは、とかく残酷である。自分は出家し、出家しようと思っている男を無理やり現実に押し戻す。

【27】夕霧が独身であった時分に申し出るべきであった、と思う朱雀院。梅枝巻での、中務の姫君との噂が想起される。⇒梅枝巻【46】。あれを書いたのは、このためであったのだろうか。

【28】朱雀院の相談にのる乳母。彼女はなかなか聡明で、朱雀院の心中を読み切り、話の落とし所を心得ている。夕霧は雲居雁一筋で、他の女には関心がない。一方、

光源氏は「やむごとなき御願ひ深くて、前斎院などをも、今に忘れがたくこそ聞こえたまふなれ」という情報を朱雀院に入れる。光源氏は、自分の地位に相応しい妻を求めている。しかし、この情報は、信頼に足る情報だろうか。言った乳母本人も、忸怩たるものがあるのではないか。これは、朱雀院の心情を慮った乳母のリップサービスにすぎぬ可能性が強い。なのに、疑うことを知らぬ善意の人・朱雀院は、この情報に飛びつく。かくて悲劇が始まる。

【29】乳母が朝顔に言及したことで、朝顔の意味が確定する。葵上⇒朝顔⇒女三宮の、いうならば、正妻ルート。その繋ぎである。六条御息所も、当然このルート上の人である。梅枝巻に朝顔を登場させた意味が、今、明らかになる。あれは、女三宮登場のための環境作りであったのだ。この線上に紫上が存在しないことを、再度確認しておこうではないか。

【30】朧月夜の例に照らして、光源氏の絶対的魅力を信じる朱雀院。自分が女だったら、たとえ兄弟であっても「かならずむつみ寄」(22)る。この思い、尋常の沙汰ではない。ファンというよりグルーピー感覚である。これは、下々の発想ではないか。いかにも軽薄で、この親にして女三宮ありの感なきにしもあらず。

【31】皇女は独身が原則。「皇女たちは、ひとりおはしますこそ例のことなれ」(22)。ならばこそ、その昔の、左大臣と大宮との結婚の重大性が理解されるというものだ。あれはいかなる事情のもとにおこなわれたものか。天下大乱の影。

【32】乳母が光源氏に肩入れした背景が分かる。兄・左中弁が光源氏方の人であった(22)。朱雀院の出家後、彼女は光源氏の権力を選択するということである。女三宮の安泰は、我が身の保全を意味する。女の政治である。

【33】「女は、いと宿世定めがたくおはしますもの」(23)。帚木巻以来一貫した思想。⇒【13】。乳母および朱雀院にとって、光源氏は、絶対の信頼がおける、世の常ならざる世界であったわけである。

【34】左中弁は、女三宮をもってしても紫上を越えられる保証はないということを婉曲に言明している(24)。また、光源氏の日頃の述懐を伝え、女での面倒はこりごとと、光源氏が思っていることをも滲ませている。この主人にしてこの臣下ありという感が深い。

【35】しかし、左中弁は言う。光源氏の妻室は「限りあるただ人どもにて、院の御ありさまに並ぶべきおぼえ具したるやはおはする」(24)。女三宮なら「いかにたぐひたる御あはひならむ」と。この発想からゆけば、女三宮は、決して六条院を破壊するものではなく、むしろ完成せしめる画竜点睛的人物であるということになろう。現実社会の論理と物語の論理との落差は、想像以上に存在するのである。

【36】朱雀院の面前で、女三宮の幼稚性についての言及(25)。面倒が予想される光源氏への降嫁再考を迫る。この乳母、ただものではない。

【37】当世姫君気質。「はがらかに、あるべかしくて、世の中を御心と過ぐしたま」

(25) ふ。自立した女の例が随所にみられたということか。バーバリズムの横行。光源氏物語は、こういう飛んでる女性の目を意識して書かれたものと思われる。しかし、女三宮の行く手を不気味に暗示する言葉ではないか。

【38】乱れた世の中への言及 (26 ～7)。この朱雀院の言葉は、後われわれが聞くことになる宇治八宮の訓戒と同一である。皇女が誇り高く生きることが難しくなっている現実。社会秩序の乱れ。こういう社会への反抗、あるいは逆願望として、光源氏の世界があったのだということが、今更ながらに分かる。女三宮を光源氏の世界に入れるということは、最高貴族の保護である。しかし、現実には、光源氏の力をはるかにこえて、「なき親の面を伏せ、影をはづかし」(26) め、「女の身にはますことなき疵」(27) を印すことになる。こうなってはいけないと、一生懸命に考えたのに、そうになってしまう。恨みいっそうつもののみ、という展開だ。現実社会の攻撃が、光源氏の保塁を破壊する構図である。光源氏の保塁が破壊されれば、もはや朱雀院の理想はもってゆく場所がなくなる。大袈裟に言えば、貴族社会の崩壊である。

【39】運命は知りたい。「宿世などいふなることは、知りがたきわざなれば、よろづにうしろめたくなむ」(26)。朱雀院の名言であろう。

【40】「あやしきものはかなき心ざま」(27)。朱雀院も女三宮の実情を承知している。だからこそ、なおさらに光源氏なのである。朱雀院は、自分の出家と死のために、あせているのだ。

【41】朱雀院の光源氏に対する信頼感是不動。「さらでよろしかるべき人、誰ばかりかはあらむ」(28) と言われては、二の句が継げぬ。朱雀院は、気の毒だが、明らかに光源氏を買いかぶり誤解している。遠くから見れば、まだまだ光源氏は完璧なのだ。

【42】光源氏以外に一応考えられる女三宮の降嫁先。螢兵部卿。藤大納言。右衛門の督(柏木)。これらは、光源氏が当代随一の男であることを証明するために引っ張り出された人々にすぎない。

【43】二心なき愛の否定。その代表として藤大納言。「ただひとへにまたなく持ちゐむかたばかりを、かしこきことに思ひ定めむは、いと飽かずちをしかるべきわざになむ」(29)。光源氏の世界の称揚である。二心無き愛より花心の愛。朱雀院も古代なる親なのだ。この、藤大納言の延長線上に柏木がいる。

【44】柏木の現在は、将来性のみ(29)。年齢は若く、位も軽い。朱雀院は、未来に賭ける気がないのである。それだけ、今が不安だということであろう。なお、柏木だが、彼は当初、夕霧をはるかに越えていた。なのに、現在ははるか後塵を拝している。光源氏の時代は、太政大臣一族にとっても辛い日々であったことが推察されよう。

【45】女三宮にのみ世の男の関心が集まり、姉宮たちは一向にそのけがなかった。

ということは、候補者たちの関心が、皇女という名誉ではなく、むしろ、経済的利益にあったのではないかという想像にかられる。朱雀院は可愛くてたまらぬ女三宮への遺産のすべてを譲りそうな雲行きであるから。⇒【22】。

【46】太政大臣は、柏木の売り込みに積極的である。北方の妹、朧月夜の線を使って熱心に努力している。

【47】柏木の思い。「皇女たちならずは得じ」(29～30)。彼は誇り高い男。大宮と結婚した祖父の左大臣の血がさわいでいるとみるべきである。

【48】蜚兵部卿は玉鬘をはずした手前、それ相当の相手を探しているという記事(30)。女三宮は、朱雀院の世界の玉鬘なのである。光源氏は、玉鬘については苦しい思いをした。朱雀院は成功するだろうか。彼は、安全パイを選ぶつもりだが。

【49】藤大納言は朱雀院の別当。朱雀院の出家後、引き続き女三宮の世話をしたいと思っている。忠義な男という印象が強い。この二心ない男に任せた方が、絶対によかったはずだ、と後に読者を思わせるための、これは人物設定ではないか。二心ない世界は、源氏物語の後半のメインテーマとなる。

【50】夕霧の自己規制(31)。未練はある。耐えに耐えてやっと結婚した雲居雁を悲しませたくない。両方に気をつかうのは嫌だ。いかにも常識人の彼らしい思考である。が、常識の人は、えてして自分の決断を後悔するものだ。

【51】光源氏を薦める東宮。これが決め手となる。しかし、東宮の発言は、政治的発言とみるべきであろう。彼は、自分の立場をさらに固めたいのである。このあたり、皆、自分のことを思い、女三宮のことを思っていないように見える。

【52】入内を薦める光源氏。彼もまた、この話に乗り気ではないことを示す。朱雀院に「うち続き世を去らむきざみ心苦し」くなる、というのがその理由である。光源氏の現在は、朱雀院と同様の立場にあることを、読者に忘れてもらっては困るのである。

【53】弘徽殿太后が「むげの末に参りたまへりし入道の宮」つまり藤壺に圧倒された桐壺時代を光源氏は回想する。も一歩すすめて、女三宮を引き取った後の六条院の世界が、かつての桐壺後宮の再現となることになるという発想が彼にはない。読者は、紫上が弘徽殿女御となる近い未来を確実に想像するはずである。

【54】二人の藤壺は、腹違いの姉妹である。女三宮の母・藤壺は、藤壺の美貌に迫る美しい人であったという噂を光源氏は思い出す。だから、女三宮も綺麗な人であろうと光源氏は想像する。しかし、女三宮が、忘れられない藤壺に似ているに違いない、だから。という具合には事は運んでいない。「いぶかしきは思ひきこえたまふ」というレベルで止まっている。彼は、この件に気乗りがしないのである。⇒【52】。

【55】年末、女三宮の裳着(34～6)。「いかめしき御いそぎの響き」(35)。朱雀院の最後の行事だと誰もが思う。腰結役は、太政大臣。玉鬘の時が思い出されよう。

腰結役までやって、柏木の一件が不発に終わるというのは、屈辱だろう。彼の父・左大臣は、光源氏の加冠役をやり、娘・葵上を光源氏の添臥とすることに成功している。⇒桐壺巻。その事実を思い起こす必要がある。

【56】秋好中宮からのお祝いは、朱雀院へのはなむけであろう。二人の思い出の品を贈る。よい場面である。二人は、光源氏の政治の犠牲者であったことをここで読者に再確認させる。そうしておけば、負い目をもつ光源氏が、朱雀院の申し出を拒みきれない環境が成立するからである。

【57】裳着の二三日後、朱雀院が出家する（36～7）。朱雀院の、この時の行動は素早い。臘月夜との別れ。「心のぬる」（38）い光源氏を、朱雀院は出し抜いたのである。

【58】光源氏が見舞いに来る。そして朱雀院と会談する（37～42）。朱雀院の出家の後で、また、朱雀院は命が「今日か明日かとおぼえ」（39）のような心細い状態であったのだから、もはや後のない状況下での会談である。光源氏にとって、退路を塞がれた会談である。可愛そうな朱雀院のために、朱雀院最後の願いは聞き届けてあげねばならない。そういう状況に光源氏は追込まれる。床の辺で、末期の願いを聞くのと同じである。拒否すれば、男がすたる。承知したのは、光源氏の優しさだろう。が、優しさというものは、とかくその場その時を取り繕うためだけのものであったりするものだ。これとて、当たらずとも遠からず、ではないか。

【59】女三宮に関して、しかし、光源氏の心の中に、好き心がなかったわけではない。本文に「御心のうちにも、さすがにゆかしき御ありさまなれば」（39～40）。藤壺に似た人を見てみたい。紫上に似ているのであれば、よいではないか。⇒

【54】。光源氏は、女三宮の一件を非常に軽く考えている。

【60】朱雀院は言う。「いにしへの例を聞きはべるにも、世をたもつ盛りの皇女にだに、人を選びて、さるさまのことをしたまへるたぐひ多かりけり」（41）。左大臣と結婚した桐壺帝の妹・大宮のことを言っているのであろうか。

【61】それにしても、光源氏は何故、老いらくが来るという四十を前にして、こういう結婚を承知してしまったのだろうか。「病は重りゆく、また取り返すべきにもあらぬ月日の過ぎゆけば、心あはただしくなむ」（41）と言う、間もなく死にそうな朱雀院への同情。忘れられない藤壺への思い。やはり、自分にかなう男はこの世にはいないという置屋のかみさんの自負。出家への懷疑。などいろいろあるが、やはり三十九歳年末の決断だから、老いることへの抵抗感というのが、心理的動機としては一番強いと考えるべきか。ちなみに、『古今集』巻第七「賀歌」にある、業平の歌を引用しておく必要がある。

堀河の大臣の四十の賀、九条の家にてしける
ときによめる

在原業平朝臣

桜花 散りかひくもれ 老いらくの 来むといふなる 道まかふがに

【62】光源氏の見送りに、「別当大納言」つまり藤大納言が同道した。彼の胸中やいかに。光源氏より二心ない彼のほうがよかったのに。細部に気をつかった作者の丁寧な物語作りといえよう。⇒【49】。

【63】紫上の思い。「前斎院をねむごろに聞こえたまふやうなりしかど、わざとしもおぼしとげずなりにしを」(43)。朝顔巻の経験が、紫上最大の試練で、あれ以上のものはないはず。あれ以上のものは我が身の上には起こりえないという自信である。しかし、読者の思いは、この時、紫上とは決定的に違うはずである。あの時は、朝顔が拒否したのであって、朝顔が身をひかなかったならば、今日と同じ状況が出現していた。紫上は、そのことを知らない。あるいは知らされていない。読者にとって、紫上はこの時はじめて客観的存在となるのではないか。全能的視点に立たされた読者は、愛すべき紫上の、社会的実態を知らされ、彼女が苦しみ衰亡してゆく様を見つづけるという面白くない作業を強いられる。

【64】翌日、雪の日。光源氏は、紫上に、いたしかたなかったのだと説明している。「対面のついでに、心深きさまなることどもをのたまひ続けしには、えすくすくしくもかへさひ申さでなむ」(44)。⇒【58】。

【65】光源氏の説得。真木柱巻の髭黒、後の夕霧巻における夕霧。この三つの説得には関連性がある。「誰も誰もものどかに」(44)。「心ひとつにしづめて、ありさまに従ふなむよき。まだきに騒ぎて、あいなきも恨みしたまふな」(45)。三十過ぎての子に意見、の感なきにしもあらず。この程度の言葉で現実が取り繕えるのであれば、世話はない。

【66】紫上の表面上の反応。光源氏の説明を理解し、「めざましく、かくてなど咎めらるまじくは、心やすくてもはべなむを、かの母女御の御方ざまにても、うとからずおぼし数まへてむや」と卑下する。紫上が卑下しなくてはならない相手が出現したということである。さてもこの反応、髭黒が玉鬘と結婚した時の、紫上の姉の反応にそっくりではないか。作者の恣意的操作であろう。⇒真木柱巻。

【67】しかし、紫上の発言「かの母女御の御方ざま」は、注目すべき発言ではないか。第一の藤壺との血縁と、一見思われるが、ここは第二の藤壺を指している。先帝の血筋の強調である。自分の血筋は、先帝のもの、という強烈な意識が紫上にはある。これは、朝顔巻の時の感想に同じである。第一の藤壺は、兄弟の兵部卿(現・式部卿)には似ていなかった。彼女は、父である先帝に似ていたのである。紫上の場合、父・兵部卿ではなく、祖父・先帝に似ていたわけである。紫上は、先帝のことを言って、朝顔の時と同じく、自分と女三宮の身分は大差ないのでと頑張ろうとしているのである。

【68】紫上の内面での反応。「空より出で来にたるやうなること」(45)。晴天の霹靂。「おのがどちの心よりおこれる懸想にもあらず」(45)。朝顔の時とは違うの

だ、ということである。が、本当にそうだろうか。光源氏の胸をよぎった藤壺の影は、読者だけが知っていることだ。光源氏は「わが心に憚りたま」(45)ふ理由が相当ある。さらに、紫上が日頃から「恨み嫉み」を受け、おとしめ疵をさがしまわっている「式部卿の宮の北の方」、つまり継母の存在を恐れている記事も、女三宮と藤壺とのかわりを積極的に暗示しよう。さらには、近い将来、あるいは現在すでに、火取をブチ投げた義理の姉の立場に、紫上が立つ可能性をも、この記事は否定するものではない。⇒真木柱巻。

【69】「今はさりとものみ、わが身を思ひあがり、うらなくて過ぐしける世の、人笑へならむこと」(46)。これで、いよいよ紫上の聖域が侵されてゆく実感を、読者は持つに違いない。大切に置かれた紫上は、この巻でようやく表舞台に立つ。この舞台こそ、人形のようにであった彼女が、自己確立を遂げることになる舞台なのである。

【70】冷泉帝も、女三宮に求婚していた(46)。結果として、それを振り切って光源氏へと、女三宮は降嫁するのであるから、普通の社会的視座からすれば、これは、考えうる最高の結婚なのだとということである。

【71】新年。いよいよこれから四十歳(46)。待った無しに来た老いらく。女三宮との結婚は、光源氏の老年への出発祝い、皮肉な餞といったところか。あるいは、光源氏は断じて年寄りではないという宣言か。

【72】「今年ぞ四十になりたまひければ、御賀のこと、朝廷にも聞こしめし過ぐさず、世の中の営みにて、かねてより響く」(46)とある。光源氏の四十賀は、桐壺時代の朱雀院行幸がそうであったように、冷泉帝時代における最大の行事となる可能性がある。若紫巻や末摘花の巻にみられた、行幸の予兆めいた作りである。

【73】正月二十三日。若菜を持った玉鬘の登場(47～53)。久し振りという感じがする。世をあげての祝いの申し出を固辞する(46)光源氏の意思などものかわ、内々で準備を進め、おしかけ同然の格好で祝賀をやってしまうところ、光源氏に愛され許されているのだという玉鬘の絶対の自信に裏付けられた行動である。本文より察するに、これまで玉鬘は、うちつづいた出産・育児に忙殺されていたものとみえる(48)。髭黒に促され、わざわざ二人の子供を連れてくる。光源氏のことなど思い出さぬほどに幸せであったのだろう。しかし、この玉鬘は、光源氏にとって苦い思い出の女(48)であり、こういう女を、めでたい四十賀の最初に登場させ、祝わせるというのも、底意ある構成であると思う。この玉鬘の手になる若菜が、この巨大な巻の巻名となっているという事実を考えれば、なおさらのことである。この巨大な巻は、光源氏を老人にする巻なのだ。

【74】夕霧と雲居雁との間に、子供が生まれているらしい。まだ、その子供を夕霧は光源氏に見せていない(49)。二人の結婚は、去年の藤の花の咲く頃だった。だから、二人の子供は、ほんの二三日前に生まれたばかりということであろう。

光源氏は、孫の誕生を照れていて、こういう言い方で、玉鬘に告げたというところか。また、玉鬘の、二人の振り分け髪の子供とて、光源氏の孫同然の子供たちなのだから、形の上からも、光源氏の老い、お爺いちゃん振りは、ここで強調される結果となる。光源氏も言っているではないか。「しばしは老も忘れてもはべるべきを」。玉鬘は、そういうところへの配慮が欠けている。光源氏の老いなどかまっておれないほどに、今の彼女は幸せで、要するに浮かれているのである。

【75】その光源氏の老いの言葉（49）だが、これは言葉だけ。まだまだ余裕がある。この巻の終わりではそうはいかないけれども。

【76】玉鬘主催の四十賀に、上達部が大勢参加している。したがって、これは、プライベートな祝宴とは訳が違う。玉鬘の夫・髭黒の設定した政治ショーという意味あいの濃い祝宴である。「大将のしたり顔にて、かかる御仲らひに、うけぱりてものしたまふ」（50）。玉鬘も、夫の役にたつ政治家の妻として、振る舞っている。「かく世に住み果てたまふ」（53）は、妻の座にすっかり落ち着いた玉鬘の現状の的確な表現であろう。「世の常の人」になった玉鬘が、「世の常ならざる人」を祝う図である。

【77】玉鬘と髭黒が主役の賀宴に、式部卿もしぶしぶ参列している図（49）。真木柱巻のイメージを、読者のなかに回復しておくためと思われる。⇒【68】。

【78】朱雀院は、依然として不例（50）。

【79】太政大臣も参列している（50）。こうなると、正月二十三日の若葉の祝宴は、光源氏四十賀の公式行事の感が強い。光源氏がいくら「私事のさまにしなし」（52）でも、それは無理というものである。⇒【76】。

【80】朱雀院の不例を憚り、鳴り者は控え目にしている。楽人は呼ばれていない（50）。それでも、当日の音楽は豪華である。名手・太政大臣と、その息子・柏木との和琴合奏。柏木の記事に力が入っているのは、これからのことを考えれば、当然のことだろう（50～1）。

【81】桐壺院伝来の琴（きん）。桐壺帝晩年に、女一宮に伝わっていた。これを、今日の日のために、太政大臣がわざわざ借りうけて持参した。この琴（きん）を、まず螢兵部卿が演奏する。そして光源氏の手へ渡る。光源氏の、琴（きん）への拘りに注目しよう。琴（きん）は、懐かしい昔の楽器。一昔前の、光源氏の一族が時めいていた時、その栄耀栄華の中心で鳴っていた楽器ではないか。今、光源氏は、失われた一族の栄華を回復し、一族の鳴らしていた楽器を鳴らしている。光源氏は、感無量であったのではないか。「いとあはれに、昔のことも恋しくおぼし出でらる」（51）。ゆかりの琴（きん）を持参した太政大臣や「酔ひ泣きえとどめ」ない螢兵部卿に、光源氏と同じ感慨があるやいなや。

【82】朝帰ってゆく玉鬘に与えた光源氏の言葉は、意味深長である。「かう世を捨つるやうにて明かし暮らすほどに、年月の行方も知らず顔あるを、かう数へ知ら

せたまへるにつけては、心細くなむ。時々は、老いやまさると見たまひくらべよかし」(52)。光源氏の、年月の流れぬ六条院という神仙世界を破ってみせた玉鬘の役割が、歴然としているではないか。

【83】「尚侍(かむ)の君」とは、玉鬘のこと。彼女は依然としてその役職にあることが確認できる。

【84】玉鬘の、光源氏に対する振る舞い(53)。目の前にいた、本当の親である太政大臣をそっちのけにして、光源氏の実の娘のように振る舞っている。かくして、光源氏は彼女の父たりえたのであり、玉鬘は光源氏の娘であることを、この四十賀によって世間に見せつけたことになる。彼女もなかなかの政治家ではないか。

【85】この玉鬘の態度は、後に語られる明石女御の態度と対応している。明石女御もまた、実の母である明石御方より、育ての母である紫上を慕っている。その意味でも、玉鬘と明石姫君との対応関係は平仄があっているといえる。

【86】二月十余日。玉鬘の記事の後に、女三宮の降嫁記事をおく。場面も同じ「若菜参りし西の放出」(53)。この構成も悪くない。この時点で、女三宮は、光源氏の胸のなかの玉鬘喪失感を埋め合わせる存在となる、と読めるからである。その意味で、玉鬘物語は、女三宮物語の前座という位置取りとなる。たまたま間違いを犯さなかった昔と、間違いを犯すことになる今との対比、ズレがあるのみ。そのズレこそが、老いの証明というのは言い過ぎか。

【87】また、こうも考えられる。盛大な四十賀宴で、光源氏の「四十」を強調し、玉鬘が連れてきた子供二人や、夕霧の赤ちゃんによって、父はおろか爺の世代にまで後退してしまった光源氏の「今」を印象づけた後で、この結婚記事を置く。ということは、この結婚のイメージを珍妙奇怪なものとするばかりである。それをあえてしているところに、光源氏世界のカタストロフィーを狙っている作者の意図が透けて見えるといえないか。

【88】「西の放出に御帳立てて、そなたの一二の対、渡殿かけて」(53)とある。「一二の対」とは具体的にどういうことか。対屋が二つあったのか。不審である。後考に備えたい。

【89】光源氏は天皇扱い(53)。したがって、女三宮の降嫁は、入内の作法と同じである。見送りの行列の供人を上達部が務めている。このあたり、この世の栄耀栄華の満載で、読んでいて辟易たる気分になる。作者も心得ていて、記事も要所を押さえるのみで、簡略である。

【90】「かの院よりも御調度など運ばる」(53)とある。梅枝巻の明石姫君の入内準備を具体的に描写してあるので、この場合、それに準じて理解すればよいわけを書くに及ばなかったのである。

【91】「かの家司望みたまひし大納言」が「やすからず思ひながら」女三宮の「わたりたまふ儀式」に参列する姿の点描(53)。これは次に展開する紫上の苦悩の

軽い先触れであろう。⇒【49】【62】。また、玉鬘による五十賀にしぶしぶ参加していた式部卿の点描と同じ発想で、この婚儀に複雑な思いを抱く大納言を書いたものと思われる。⇒【77】。

【92】車を寄せた所へ、光源氏が出向いて、女三宮を降ろす。ここのところは、入内と違っている。臣下だから、と本文にある（53～4）。女三宮の方が、光源氏より格が上なのだという事実を記しているのである。これは、紫上が逆立ちをしても勝てぬ相手が来たということでもある。その日、紫上が女三宮に対して抱いたイメージ「はなやかに生ひ先遠く、あなづりにくきけはひ」（54）は、間違いない敗北の予感である。もし、女三宮が、紫上のイメージ通りの女であったなら、紫上の人生は、今日のこの日をもって終わりである。

【93】女三宮の降嫁は、嫁入り婚である。葵上の場合、通い婚であった。これは、光源氏の地位のために出た差と考えるべくよからう。

【94】光源氏は女三宮に失望する。「いといはけなきけしきして、ひたみちに若び」た女三宮は、「かの紫のゆかり尋ね取りたまへりし」頃の紫上に比較すべくもなかった。光源氏は思う。「いとあまりものの榮なき御さまかな」（55）。この瞬間から、【92】の「もし」は無くなる。作者の紫上救出は素早い。素早すぎると思う読者もいるはずだ。作者には、紫上に修羅場をくぐらせようという気がない、と見たほうがよさそうである。さて、この瞬間から、悲劇の主人公は、女三宮へと移る。光源氏にとって、この結婚が朱雀院への義理果たしの意味しなくなるからだ。「かの院に聞こしめさむことよ」（55）。このことを知っているのは、今のところ光源氏と読者のみ。実情を知らぬ紫上は、心底悩む。紫上にとっては、束の間の残酷な時間ということになる。以後、読者は、安心して紫上の苦悩を眺めるという位置取りになる。

【95】光源氏と心をあわせて、婚儀三日間の世話をし、光源氏の「御衣どもなど、いよいよたきしめさせたまふ」（55）紫上のイメージは、火取を投げる前の髭黒大将元北の方、つまり紫上の姉のイメージである。紫上が火取を投げぬ分、苦悩は深く内攻したとみてよい。⇒【68】。⇒真木柱巻【29】。

【96】光源氏の反省。紫上に並ぶ妻などありえない。「あだあだしく心弱くなりおきにけるわがおこたりに、かかることも出で来るぞかし」（55）。女三宮の相手としては、夕霧こそ相応しかったのだ。という彼の反省は全く正しい。後悔先に立たず。高い授業料のつけを、今後、光源氏は返済できるであろうか。老いての失敗は、致命傷となる。光源氏、果たして大丈夫か。

【97】紫上が光源氏に見せた、現在の心境。「目に近くうつればかはる世の中を行く末遠く頼みけるかな」（56）。素直ないい歌である。女三宮の降嫁は、彼女の須磨・明石。また、朝顔以来の試練でもあるが、長く保持してきた彼女の復原力も、「末に、ありありて」（56）そろそろ限界にきているのではないかと気にかかる。

【98】三日目。ぐずぐずする光源氏を送り出し、見送る紫上の姿は、真木柱巻の姉に同じである。「いとただにはあらずかし」(56)と本文にある。この三日目の晩から朝にかけての描写は濃密である。若菜巻の見せ場でもある。

【99】「思ひ定むべき世のありさまにもあらざりければ、今よりのちもうしろめたくぞおぼしなりぬる」(57)。紫上は、世間で認知保護された正妻ではない。本人も彼女のアキレス腱を十分に認識している。

【100】女房たちの本音。紫上の建前。いかにも対照的である。こうしておいて、本音を強調する手法(57～8)。このままで、紫上が終わるはずがない。「かならずわづらはしきことも出で来なむかし」。世智にたけた女房たちの予想はよく当たる。

【101】紫上の想念。「ひとしきほど、劣りざまなど思ふ人にこそ、ただならず耳たつことも、おのづから出で来るわざなれ」(58)。桐壺更衣を苛めた女御・更衣の解説になっている。

【102】紫上つきの女房の中に「中務」がいる(58)。読者ははたして覚えているだろうか。彼女は、最初葵上のところにいて、頭中將に肘鉄をくらわせ、光源氏一筋に生きて大宮に睨まれていた。この人物と同一人物かどうか、やや疑問なきにしもあらずであるが、その後、光源氏の許に移ったと考えたい。光源氏の須磨退去の頃、紫上の許に託され、以後、紫上に心服するようになり、いまでは紫上の側近である。こういう女の点出が、言わず語らずに、紫上の実力の表示となるのである。と同時に、時の流れ、紫上のまわりに漂う古さを表示することにもなる。もう一人の「中將の君」は、幻巻に出てくる中將であろう。いずれも、光源氏が「ただならぬさまに使ひならしたまひし人ども」(58)、つまり召人である。真木柱巻の木工の君に相当する。髭黒大將北方の狂乱の場で、木工の君は、事態の深層心理を冷静に分析してみせたことが、今更ながら思い出される。⇒真木柱巻【33】。

【103】紫上に見舞いの言葉をかける「異御方々」(58)。花散里や明石御方しか考えられない。あるいは末摘花、空蝉。まさか。この見舞い、紫上のプライドをいなく刺激したのではないか。「かくおしはかる人こそ、なかなか苦しけれ」(58)と本文にある。『蜻蛉日記』でも、作者が時姫にこのような手紙を出した場面があった。当時の礼儀かもしれないが、あまりよい趣味とはいえないのではないか。

【104】須磨の別れを思い出す紫上(59)。中務からの連続。自然な文脈である。須磨の「近き別れ」こそ、光源氏と紫上との夫婦愛の確立であったことを再確認させる条であろう。死に別れより生き別れ。あの試練を越えてこそ、二人の愛は確固不動のものとなったはずなのに。と、紫上は思うのである。

【105】夜。光源氏の夢の中に紫上が出てくる。紫上の苦悩が頂点に達し、彼女の魂が天駆けったことを示す条である。葵巻における六条御息所のイメージが、紫

上に重なって、ひとしお哀れをかます設定である。この時、紫上が六条御息所の運命を甘受することになっていたならば、下巻で、紫上が御息所の死霊に取りつかれることはなかったのではないか、などといふ余計なことを想像してしまわないか。

【0106】紫上の夢の効果は抜群で、光源氏は一番鶏が鳴いたのをしおに、まだ「夜深き」ころ急いで帰ってくる。もはやこれまで。紫上の苦悩は一瞬にして終わる。不満な読者もいることだろう。そういう読者のために言えば、天女はちょっとだけ悩む。そのちょっとは、われわれの世に換算すると、はかりしれぬ量である。と言っておこうか。

【0107】「明けぐれの空」(60)とは珍しい表現である。作者は、この言葉が好きなのではないか。

【0108】帰ってきた光源氏が、しばらく待たされる。彼が庭の雪を眺める場面。彼がその時つぶやいた「なほ残れる雪」(60)は、『白氏文集』巻十六「叟棲曉望」の一節である。この詩は、白楽天が江州司馬に左遷されて、かの地の城で四方を眺めて作ったものである。光源氏も、彼の生涯における江州であった須磨・明石を、この時思っていたとすれば、紫上と光源氏の二つの心は、同じ思いを共有していたことになる。紫上への、せめてもの救いである。この詩を持ち出した作者の狙いも、そこにあるというべきだろう。⇒【0104】。

【0109】雪であるが、この日は二月中旬、桜の頃。雪の場面はちょっと苦しいのではないか。やはりここは「なほ残れる雪」のためか。冷え冷えとした簀の子にたたずむ光源氏、という舞台設定のための必要雪か。光源氏が、五日目の朝、女三宮に贈った「心乱るる今朝のあは雪」は梅につけた、とある。桜ではなく梅の頃だとすれば、自然である。二月中旬は、梅と桜のわたりの頃と理解すべきことなのかかもしれない。

【0110】「院に聞こしめさむこともいとほし、このころばかりつくろはむ」(61)という光源氏の胸のうち。紫上も実情を把握してしまう。紫上の悲劇の終わりである。女三宮からの返書を見て、その幼さを確認する場面(63)は、その駄目押しである。光源氏は言う。「心やすく思ひなしたまへ」。女三宮は貴方の敵ではないのだ。

【0111】昼間見る女三宮。「いと御衣がちに、身もなく、あえかなり」(64)。外面は内面の表示である。「兄の面嫌ひせぬこち」(64)は、ちょっと酷いではないか。「心やすくうつくしき」と続くから、よしとするか。

【0112】女子教育に失敗した朱雀院。成功した光源氏。女三宮と紫上との対照は歴然としている。光源氏の胸のうちでは、朱雀院は男性的な学問の方面では問題があるにしても「をかしき筋、なまめきゆゑゆゑしきかたは、人にまさりたまへる」人である。その人が一番可愛がったこの女三宮を、「などてかくおいらかに生ほ

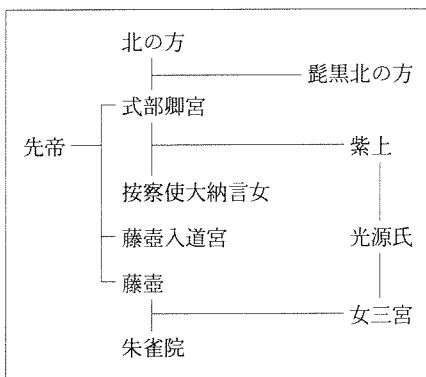
したてたまひけむ」(64)。光源氏が女三宮との結婚を承知した背景には、こういう思念・期待もあったと見るべきである。

【0113】現在、光源氏は女性に対して寛容になっている。「とあるもかかるも、際離ることは難きものなりけり、とりどりにこそ多うはありけれ」(65)。光源氏は、女三宮の存在をも許す心境になっていることは事実である。これは、単に光源氏が年をとったということだけなのではないか。

【0114】この段階で、女三宮は、紫上の引き立て役、刺激剤に過ぎない。光源氏は女三宮を知ったことで、紫上の価値を再評価し、愛を増幅する結果となった。本文は、紫上の絶対性を強調している。「一夜のほど朝の間も、恋しくおぼつかなく、いとどしき御心ざしのまさるを、などかくおぼゆらむと、ゆゆしきまでなむ」(65)。この感情は、かって夕顔、藤壺に対して抱いた感情の再現である。

【0115】二月。朱雀院が西山の寺に入る。死の準備である。しかし、この朱雀院、なかなか死なない。ここが、この巻の不気味なところだ。

【0116】朱雀院から紫上への手紙(65~7)。紫上に対して朱雀院は、「尋ねたまふべきゆゑもやあらむ」と言う。紫上と女三宮とは従姉妹。系図をつらつら眺めていると、ある種の感慨にとらわれる。女三宮が光源氏の世界に引き取られ、運命の悲哀が予想される今となってみると、その昔、今の女三宮のように幼かった紫上を式部卿家に渡すことを懸念した少納言の心は正解であったというべきである。⇒若紫巻【62】。昔の紫上が陥りそうであった運命を、今、女三宮が甘受しているという構図である。となると、光源氏は、昔の光源氏ではなく、式部卿(当時は兵部卿)にほかならないということになる。このことは、この巻を理解するうえで、重要なポイントであると思う。



【0117】紫上の、朱雀院への返歌。「背く世のうしろめたくはさがりがたきほだしをしひてけな離れそ」(66)。後は私に任せて安心してください、と言わぬところが凄いではないか。現在、彼女はなかなか厳しい心境にあって、「ただ心をのべ」たのみである。これが若菜巻なのだ。

【0118】弘徽殿太后の里郎が、二条にあったことが今判明する。光源氏の二条院の近隣である。賢木巻に、藤壺の三条院の向かいとあった。目と鼻の先の近隣であり、朱雀院の西山行きにともない、ここに臘月夜が移ってきていたわけである。危ない展開が予想されよう。

【0119】光源氏が、朱雀院に取り残された朧月夜との交渉を復活させるのは、俗にいう「焼け棒杭に火」なのであるけれども、これを朱雀院側に立って眺めたら、やりきれない図柄である。女三宮の悲運、そして朧月夜の背信。

【0120】女三宮への失望感が、光源氏の心を、藤壺がいた時代に向かわせるというのは自然な流れなのではないか。女三宮の中に期待した藤壺がいなかったのだから。朧月夜は、そういう光源氏の心の底に応える存在であったにちがいない。また、こうも考えられないか。女三宮ごとき出来損ないを自分に押しつけた朱雀院に対する光源氏の意趣返し。が、これはいささか考えすぎか。ままよ、光源氏と朧月夜との関係復活は、この若菜巻の場に、須磨・明石の時間を復活し、今の紫上の存在の意味を問うという意図がからんでいるということであろう。須磨・明石を否定した現在の自分の行為を取り消したいという光源氏の深層心理が、須磨・明石の象徴である朧月夜に光源氏を走らせた、と解釈すべきではないか。⇒

【0104】 【0108】。

【0121】末摘花が、朧月夜の許に行く口実につかわれている。彼女は、このところ病気のようなのである。このあたりで死ぬということかもしれない。

【0122】朧月夜の件に対する紫上の反応。「姫宮の御ことののちは、何ごとも、いと過ぎぬるかたのやうにあらず、すこし隔つる心添ひて、見知らぬやうにておはす」(70)。女三宮事件は、確実に彼女を変えた。彼女は光源氏からすこしずつ離れていっている。光源氏は、すくなくとも彼女にとって全てではなくなっている。紫上が、諦めと孤独の道を歩みはじめているという現実の表示であろう。

【0123】旧右大臣邸の「東の対」「辰巳のかたの廂」(71)とある。花宴巻の巻末、光源氏が、溜め息をついていた朧月夜の手を取った「東の戸口」と同じ場所ではないかと思われる。朧月夜も、久しぶりの対面の場所として、ここをわざわざ選んだのだろうか。季節も同じ、藤の頃である。「昔、藤の宴したまひし、このころのことなりけりかし」(73)と光源氏も思い出している。今、光源氏は四十歳であるから、あれから、ほぼ二十年の年月が流れているのである。

【0124】光源氏と朧月夜との対面が、須磨の意識のもとにおこなわれたことが、二人の逢瀬の場面で確認できる。それにしても、この二人の再会の場面が非常に長く書かれている(67～75)。これは、須磨・明石の意味の強調以外なものでもない。須磨・明石の時間は、何だったのか。女三宮も朧月夜も、紫上にとっては、同じ思考の対象であったことを忘れないようにしたいものだ。

【0125】朧月夜の許から帰ってきた光源氏に、紫上は言う。「昔を今に改め加へたまふほど、中空なる身のため苦しく」(75)。光源氏は、昔の花宴の時と同じ場所で朧月夜との時を過ごした。まさに「昔を今に」である。かつて朝顔巻で、朝顔に朝顔の花を贈ったのと同工異曲。しかし、昔は昔で、今になることは断じてない。光源氏は忌まわしい四十歳の現実には立ち戻らざるをえないのである。

【0126】「中空なる身」。紫上の自己認識。正確である。

【0127】嫉妬もせず、光源氏を自分の許に引き戻す紫上の実力は相当のものである。が、これは、光源氏の愛の故であって、紫上の愛の故ではない。「ただおいらかに引き抓みなどして教へたまへ。隔てあるべくもならはしきこえぬを、思はずにこそなりにける御心なれ」(76)と言い、光源氏が全面降伏することになるのだが、光源氏と紫上との間の「隔て」はもはや修復しがたいのではないか。朧月夜に走ったのも、光源氏としては、紫上の嫉妬を期待してのことであった。なのに、となると、紫上の愛の心細さが残るのみである。

【0128】紫上の機嫌をとるにかまけて、光源氏は女三宮の許にあまり行っていないらしい。周辺はともかく、そのことを女三宮は何とも感じていない。彼女は、ただいまのところ、光源氏にとって「おいらかにうつくしきもて遊びぐさ」(76)にすぎない。

【0129】明石姫君は「桐壺の御方」(76)、「淑景舎」(77)と呼ばれる女御である。この呼称に注意したい。彼女は、桐壺の更衣の見果てぬ夢を実現する存在であった。すでに、ほとんどその夢は成就している。この夏懐妊。この時、女御は十二歳。実母・明石御方は、いまや女御につききりである。一族復興のテーマは、きわめて順調に推移していることが理解されよう。

【0130】明石女御は夏懐妊している。藤壺に同じである。これも、意識的操作なのであろうか。このあたり、昔を今にの発想が強い。女御の出産は二月頃かもしれない。

【0131】明石女御が「姫君のおはします御殿の東面に」(77)里下がりする機会をとらえ、光源氏に、女三宮との対面を申し出る紫上。紫上が、いよいよ自力で動きだした感が深い。彼女は、六条院の新秩序を形成すべく、女の政治に自ら乗り出したのである。女三宮との対面に際しては、側にいる明石御方の方に気をつけて、髪を洗っている点も、見逃すべきではない。紫上の行為は、今や敵に値しない女三宮など眼中にはなく、明石御方の幸福と、彼女の上昇指向にクギをさす政治的行為であるとみるのは考えすぎだろうか。光源氏の手を借りることなく、六条院における女の秩序に決着をつけようという紫上の行為そのものが、彼女の光源氏からの独立宣言でなくて何か。

【0132】光源氏は、女三宮に、紫上との対面するにあたっての注意をあたえている。父親感覚である。女三宮の頼り無さを、ここで作者は強調してみせる。対面の前に勝負はついていると言いたげである。

【0133】紫上の自信。「われより上の人やはあるべき」(78)。と考えつつも、手習を見て「わが身には思ふことありけりと、身ながらぞおぼし知らるる」(78)。手習は心の底の表示である。天女の衰え、天女の嘆きとは、このようなものか。紫上の発想は、天人で、彼女は今、美しさの頂点に立ち、これから衰亡への道をゆっ

くりと下り始めるということではないか。天女の衰えは、五つの表示がある。いわゆる「天人五衰」だ。『往生要集』の記述によれば、「一つには頭の上の花鬘忽ちに萎み、二つには天衣、塵垢にけがされ、三つには脇の下から汗出で、四つには両の目しばしばくるめき、五つには本居（ほんご）を楽しまざるなり」（79）。紫上の今は、さしずめ「本居を楽しまざる」ところであろう。

【0134】紫上の美しさ。光源氏の証言。「去年より今年はまさり、昨日より今日はめづらしく、常に目馴れぬさまのしたまへる」（76）。光源氏は、紫上のことを本当に理解しているのであろうか。無邪気なものである。紫上の手習を見て、少しは了解しているようだけれども。「ありがたくあはれにおぼさる」（80）。

【0135】明石女御・紫上・女三宮、そして明石御方の対面。この時、光源氏は、朧月夜のところに逃げている（80）。彼には、もはや事態収拾能力はないということの端的な表示である。

【0136】明石女御が、実母より紫上を慕っているという記事（80）。紫上の実力の誇示である。生みの母より育ての母。まだまだ明石御方なんかには負けないということである。なお、この女御の意識が玉鬘の意識と対応関係にあること、すでに触れた。⇒【85】。

【0137】紫上と女三宮との対面。その幼さに、母親感覚で対応する。中納言乳母を呼び、彼女に優しい言葉をかける。女三宮にも「絵などのこと、雛の捨てがたきさま」を語る。そういえば、紫上が雛遊びに熱中した昔が懐かしく思いだされる。いま女三宮がその頃なのだ。これで女三宮は紫上にうちとけ無邪気に安心する。女三宮ごとき、ものの初めから紫上の敵ではなかったのである。かくして、紫上は、失われたかに見えた六条院のヘゲモニーを確立する。世間のとかくの噂も鎮静した。彼女の政治は、またたくまに成功をおさめることになる。

【0138】次に描かれる、紫上の主催になる光源氏の四十賀の祝宴（82～6）。この盛儀こそ、六条院における紫上の権力誇示以外にもものでもない。作者は、ここで、紫上の少し悲しい絶頂を描き尽くそうと考えているものと思われる。

【0139】十月に「嵯峨野の御堂にて、薬師仏供養」。玉鬘の行った四十賀と比較して、そのスケールの大きさに注目したい。

【0140】十月二十三日。精進落としの宴を二条院で行う。「私の殿とおぼす二条の院」（83）という記述から、二条院が紫上の所有となっていることが知れる。この二条院は、いうまでもなく、桐壺更衣の里邸であったわけで、紫上の役目も明石女御同様、桐壺更衣の夢の実現にある。こちらは、純愛のテーマ。しかし、光源氏と紫上との純愛。成就したといえるであろうか。はなはだこころもとない。

【0141】二条院における祝宴は、明石女御も参加した盛儀で「南の廂に、上達部。左右の大臣、式部卿の宮をはじめたてまつりて、次々はまして参りたまはぬ人なし」（84）とある。楽人も、今度は参加している。紫上、生涯最良の日といった

趣である。

【0142】光源氏の席の後ろに立てる屏風は、紫上の父・式部卿の担当で、「例の四季の絵なれど、めづらしき泉水、壇など、目馴れずおもしろ」(84) いものであったとある。『古今集』賀の部に、「内侍のかみの、右大将藤原朝臣の四十賀しける時に、四季の絵書ける後の屏風に書きたりける歌」として七首載っている。これが参考になろう。

【0143】夕霧と柏木の舞(84~5)。これは、前巻藤裏葉に引き続き、かつての紅葉賀巻の再現である。しかし、確実に一世代交代し、光源氏が、古い世代となったという印象はこれで決定的なものとなる。「いにしへの朱雀院の行幸に、青海波のいみじかりし夕」(85)を覚えていた人々もいたし、何よりも光源氏本人が感慨無量であったと記してある。

【0144】楽人が禄をかついで池の堤を「千年をかねて遊ぶ鶴の毛衣」のような姿で帰っていった後の、内輪の演奏会がまた豪華である。楽器は、東宮が用意した。朱雀院伝来の琵琶、琴(きん)、帝より賜った箏の琴。

【0145】回想にふける光源氏。彼は藤壺を思っている。藤壺が生きていれば、自分もこのようにして祝ってやっだろうに。紫上主催の賀宴は、残酷にも、この光源氏の夢で閉じられる。紫上の生涯は一体なんだったのだと読者はおそらく思うだろう。紫上が自己確立を遂げたことは、すでに触れた。光源氏の夢は、紫上の人生選択を側面から支持する結果となる。紫上の独立は、正解だったのだ。哀れ光源氏は、藤壺の世界に取り残されるのみ。

【0146】光源氏の藤壺回想は、藤壺の夢を実現した感慨でもある。藤壺の生前は、ともに東宮の安泰をはかり、即位まで仕上げた。今、自分は、かつての絵合巻の藤壺の立場にたっているということである。この、政治的感慨に紫上の入る余地がないということでもある。

【0147】父と名乗れぬ冷泉帝の苦しみ。せめて四十賀を、と思うが果たせない(86)。

【0148】十二月二十日過ぎ、秋好中宮主催の賀宴(86~8)。「父宮、母御息所のおはせまし御ための心ざしをも取り添へおぼす」。父母が生きていれば、必ず光源氏の賀を行ったであろう。その分も、という心である。父宮・前坊も、光源氏の一族側に立つ人であった事情をさりげなく示す条といえないか。母・御息所は、当然として。このあたり、描かれない源氏物語を語っているようで、興味は尽きない。

【0149】「古き世の一のものと名ある限りは、皆つどひ参る御賀になむあめる」(88)の草子地は、言いて妙である。そう、古き世が復活する物語こそ、源氏物語なのである。

【0150】冷泉帝は、自分の賀宴を、自分の実の弟である夕霧に代行させるというかたちで実現する(88~92)。夕霧を右大将に任命してわざわざ行った帝の執念は、

- 光源氏の花道。この時、光源氏も、紫上同様、人生の頂点に立っていたのである。
- 【0151】 帝主催になる賀宴は「親王たち五人、左右の大臣、大納言二人、中納言三人、宰相五人。殿上人は、例の、内裏、東宮、院、残る少なし」(88～9) というのだから、上層貴族ほぼ全員参加である。ハイライトは、太政大臣の参加であろう。彼は太り、「今盛りの宿徳」(89)に見える。蛍兵部卿を加え、光源氏と三者による音楽も圧巻であった。蛍兵部卿が琵琶、光源氏が例によって琴（きん）、太政大臣が得意の和琴。正月の、玉鬘主催の賀宴の再現である。三者とも、「昔の御物語どもなど出で来て」「御酔ひ泣きどもえとどめず」(90)、とある。どんなに役者が豪勢でも、こうなったら、ただの年寄りの合奏にすぎぬではないか。光源氏は、嫌だ嫌だと言いながら、結局、この一年は、みんなに四十賀を祝われて、むりやり四十歳の現実を押しつけられてしまう。この時、光源氏がどうじたばたしようと、彼の目の前には、老いらくの道しかないのである。それをとことん知らしめる一年であると、このめでたい一年は総括できる。
- 【0152】 豪華絢爛たるこの夕霧の賀宴が「丑寅の町」(88)、つまり花散里の御殿で行われたことで、花散里の人生が括られていると思う。彼女は、夕霧の庇護のもとに、幸せな生涯を閉じるに違いない。
- 【0153】 雲居雁も、玉鬘同様、政治家の妻として、夕霧の後方を守り、活躍しているようだ。
- 【0154】 新年は、明石女御の出産の場面(92～8)から始まる。明石一族の栄耀栄華を語る時がいよいよ来た、ということである。
- 【0155】 正月より「御修法不断に」「寺々社々の御祈りはた、数も知らず」(92)とある。のるかそるか、ここを千度の祈りである。見事、皇子が生まれるか否か。藤壺出産の時もこうであったにちがいない。あの時は、二ヵ月が余計であったから、必死の祈りが限界まで続いたと想像される。
- 【0156】 出産による死。葵上での経験を思い出し、紫上が懐妊・出産という運命にいたらなかったことを残念に思う一方で嬉しくも思う光源氏の心理が語られている。紫上が子を持たぬという発想の核は、案外そんなところにあるのかもしれない。しかし、ここで、作者が紫上に言及したことで、読者は、明石一族と紫上との関係を考えざるをえなくなる。紫上は、地上の栄華とは無縁な存在であるが、それにしても、これから語られる明石一族の徹底的な地上の栄華の物語は、女三宮の降嫁に続いて、紫上を少し悲しませる要因となるのではないか。天人は、少し悲しみつつ徐々に衰亡してゆく。天人五衰。「本居を楽しまざる」。⇒【0133】。
- 【0157】 出産の場所に注目。「明石の御町の中での対」。明石女御は、故郷で産むのである。陰陽師が、「所をかへてつつしみたまふべく」言ったのは何故か。春の御殿では、もののけにやられる、ということか。これは、後の六条御息所出現のための軽い予兆だろうか。

【0158】明石御方にも注目したい。「母君、この時にわが御宿世も見ゆべきわざなれば、いみじき心を尽くしたまふ」(92～3)。彼女は深く期するものがあったのである。明石御方を、ただ単に耐えているだけの女と思ってはいけない。

【0159】明石尼君がこの時まで生きていて、自分の御殿にきた女御によく会う。夢の心地は、当然だろう。そもそも、明石女御が今日あるのは、尼君の力がおおきいのである。⇒薄雲卷【8】。そして、何も知らぬ女御に、昔の物語を語る(93～7)。「ほけ人」明石尼君の話は露骨だが、これこそが、何も言わない母・明石御方の心の底に秘めた一族の意思である、という構想である。これは、藤壺が死んだ時、冷泉院出生の秘密を夜居の僧が語った場面と対になる構想であろうと思われる。明石の栄華も、傷をもった栄華なのであって、完全無欠のものではない。手放しの幸福への作者の嫌悪、という一面も確かにある。しかし、ここは、冷泉院が密奏をうけることによって、藤壺と光源氏との罪を引き継いだように、明石女御は、今一族の秘密を聞いたことによって、今これより明石を引きずって生きることになる。明石一族の夢は、こうして明石女御に繋がったのである。女御が出産をする前に、秘密を聞いている点も、細かい芸である。明石姫君は、「明石の御町」で明石になって明石の夢をこの世に産み出した、と読めるではないか。出産直前の塩くさい場面(96～7)をみれば、特にそう思うはずだ。しかし、この秘密も、後に語られる明石入道の夢の前座にすぎない。作者は、二段構えで、明石を女御と読者に押しつけるのである。

【0160】明石姫君の反省(94)。「対の上の御もてなしに磨かれて、人の思へるさまなども、かたははあらぬなりけり」。かくて、紫上の悲しみは、またしても、たちまち解消する。そして、明石女御の感謝の念でもって、紫上のこれからの人生が保護される道が提示されることになる。明石女御が実母より紫上の方を慕っているという記事は前にあった。⇒【0136】。ここはその地固めの趣がある。これは、紫上の人生の終わりであろう。紫上はこのまま推移するのであろうか。

【0161】明石入道は、いま仙人のようにになっている(94)。あれから13年の歳月が流れている。仙人という言葉が使用されているのにも注目される。

【0162】明石尼君は、現在六十五六歳。現在、光源氏が四十一歳であるから、逆算して、尼君は、女盛りであった頃、近衛中将を捨てた若き日の入道に従って明石に行ったものと推測される。光源氏は妻を京都に残して播磨に行ったが、明石入道は妻と一緒に播磨に行ったのである。帰る意思の差が妻の滞同に表れているではないか。

【0163】明石御方は、明石女御が「今はかばかりと御位を極めたまはむ世」(96)、つまり中宮になった暁に、明石のことを伝えようと思っていた、とある。明石御方の秘めた志を、ガラリと見せつける条である。⇒【0158】。今や彼女は明石入道と同じレベルの人物となっている。野望の人なのである。

- 【0164】「老いの波かひある浦に立ち出でてしほたるあまを誰かとがめむ」。尼君の現状を表現したい歌である。
- 【0165】三月十余日、皇子出生（97）。冷泉院出生のちょうど一月後に、誕生日が設定されている。意識的な操作であろうか。⇒紅葉賀巻【36】。
- 【0166】紫上が、わざわざ明石町までやってきて、若宮を抱いてはなさない場面（98）。おそらく読者は、難遊びが好きであった彼女の少女時代を思い出すことだろう。かくして、さらに紫上は明石に結び付けられる。⇒【0160】。
- 【0167】若君の世話を紫上に譲り、自らは「御湯殿のあつかひ」をする明石御方（98）。負けて勝つ彼女の人生が凝縮している。泣かせる場面であろう。
- 【0168】出産を終えた、明石女御は「かひある浦」（97～8）を去り、元の春の御殿へ復帰する。このあたり、出産のために上陸してきた豊玉姫のイメージを借りているのであろう。この豊玉姫は故郷に帰らない。
- 【0169】座養も豪華である。帝、朱雀院、秋好中宮、「次々の親王たち、大臣の家々」（99）。世をあげての祝宴である。
- 【0170】前年の四十賀の時と違って、若君誕生に関する儀式は「例のやうにことそがせたまはで、世になく響きこちたきほど」（99）に光源氏はした。男皇子を得た彼の喜びの素直な表現である。と同時に、彼の政治力の誇示でもあろう。四十賀は、考えてみれば、政治的には決してプラスとなる儀式ではない。光源氏は、これからの人なのであって、まだまだ未来のある現役の政治家なのだ。ということ、若君誕生の儀式で最大限に表現できるという計算が彼の胸の中にある。事実その通りである。この若君が即位する時が、光源氏の栄華の頂点なのだから。
- 【0171】光源氏の言葉によれば、夕霧は子沢山であるらしい（99）。いかにも律儀者の夕霧らしい結果である。が、彼は子供を光源氏に見せたがらない。なぜだろう。あまり可愛い子ではないのだろうか。あるいは、家庭がうまくいっていないのか。はたまた光源氏をお祖父さんにしたくないという子の親思いか。単に照れているのみか。この皇子誕生の場面を予測したためか。やや気にかかる。⇒【74】。
- 【0172】紫上と明石御方との和解（100）。若宮の可愛らしさと、明石御方の「卑下」の故である。
- 【0173】明石入道の入山（100～1）。かつて彼は明石御方に、望みを達しなかったら海に入れと言っていた。⇒若紫巻【13】。いま彼は望みを達して、海ではなく山に入る。彼が出家後も入道として、この世にこだわりつづけたのは何故か。まもなく明らかになる。
- 【0174】明石入道の遺言が届く（101～3）。遺言の全容が、追伸まで含んだ完全な形で『源氏物語』に収録されていることに、まず注目しようではないか。遺言の重みについては、源氏物語ではつとに注意されるところであった。光源氏の祖父・按察使大納言の遺言、桐壺帝、はたまた六条御息所の遺言などが想起されよう。

この明石入道の遺言は、その大納言や桐壺帝、御息所の遺言に勝るとも劣らない重要な意味をもつ遺言であると考えたい。思えば、この入道の遺言の概略は、すでに遠く若紫巻で予告されていたものであり、それが、ここにいたり、ようやくその全貌を開示する、ということである。明石一族の物語は、ここでそのスケールの全容を『源氏物語』上に表示し、明石一族の物語は、源氏物語の全体を支える屋台骨であったことが、この巻、この段によっていまさらながらに読者に示されるわけである。これまで、明石入道のイメージといえば、理解不能な変人・滑稽な人物であったにすぎない。今や、その相貌は一変し、未来を見通す、高麗の相人のような賢人の風貌を呈することとなる。劇的変容ではないか。

【0175】入道は言っている。「仮名文見たまふるは目の暇いりて、念仏も懈怠するやうに」(101)。漢文に馴れた男にとっては、仮名の世界はこのようなものであったとみえる。男が仮名文を読むということは、いま我々が変体仮名を読む場合のような苦勞を強いられるということである。これは、なにげないことを言っているようだが、重要な立言であると思う。物語は、おそらく、男に読まれる心配のほとんどない、女だけの独自の世界であった、ということがこれで分かるのではないか。源氏物語の内容が、当時の実情に反して反藤原氏のだとか歴史離れが激しすぎるとかいう批判は、当時の物語事情を無視した批判なのである。

【0176】明石入道は、明石御方が生まれる直前、二月に信じがたい夢を見た。「みづから須弥の山を、右の手に捧げたり。山の左右より、月日の光さやかにさし出でて世を照らす。みづからは山の蔭に隠れて、その光にあたらず。山をば広き海に浮かべおきて、小さき船に乗りて、西のかなたをさして漕ぎゆく」(102)。入道は、この夢に彼の人生の全てを賭けたのである。彼は、それから内典外典を読み、夢の研究をした、とある。夢は語れば破れることを、その時知って、それ以後、黙して語らず、夢の実現に邁進したものと考えられる。なお、『蜻蛉日記』下巻に、石山寺の僧の見た夢の話がある。道綱母が「御袖に月と日とを受けたまひて、月をば足の下に踏み、日をば胸にあてて抱きたまふ」という夢である。これを夢解きに判断させたところ「みかどをわがままに、おぼしきさまのまつりごとせむものぞ」と言われたという。この記事などを参考にして、この条は構想されたのかもしれない。

【0177】入道の遺言の文面より察するに、明石御方が生まれてから、明石に赴いたことが分かる。時は、光源氏誕生の少し前であろうかと想像される。

【0178】明石に入道が赴いたあたりの事情。「力及ばぬ身に思うたまへかねてなむ」(102)。都にいては、この夢の実現に向けた未来が開けぬ、と彼は考えたのである。政治的に希望のもてぬ状況、またそういう入道家家の経済状況であったと推測される。しかし、若紫巻の入道紹介記事によれば、彼は大臣家の君達で、近衛中将であった。将来の栄達は確実で、「力及ばぬ身」ではない。ここは、彼が、

「力及ぶ身」から「力及ばぬ身」となった状況の激変を考えるべきである。政変。天下大乱。つまり、彼の一族は失脚したのである。こう断言してよいと私は思う。彼の従兄妹である、光源氏の母・桐壺更衣の家もまた連座したものと考えると、桐壺巻の、大納言の遺言や、祖母・北方の、家柄がよいのに後見がないという心細い状況は理解出来ないのではないか。

【0179】入道は、夢を信じただけではない。夢が実現するように努力している。住吉明神を中心に、諸社に願をかけている。

【0180】「九品の上の望み疑ひなく」(103)は、入道の極楽往生。「小さき船に乗りて、西のかたをさして漕ぎゆく」夢の実現である。

【0181】入道の辞世。「光いでむ暁ちかくなりにけり」は、明石女御の産んだ皇子が天皇となる日が近づいたという意味だが、実際この手紙を書き終えた時刻のことをも言っているに違いない。実に運命的な暗合である。「今ぞ見し世の夢語りする」(103)。夢は実現しないうちに人に語ると破れる。⇒【0176】。

【0182】入道は、明石御方に言っている。「ただわが身は変化のものとおぼしなして」(104)。一瞬、「わが身」は入道のことかと誤解しそうだが、明石御方のことである。人間ではない、異界の者。ここでも、海龍王国の発想が生かされている。

【0183】尼君への手紙のなかに「かひなき身をば、熊狼にも施しはべりなむ」(104)とある。これは、入道のイメージを、七匹の飢えた子を持つ虎に我が身を施した薩埵太子の風姿に重ねる処置であろう。⇒『三宝絵詞』。薩埵太子は釈迦の前身であるから、これは、入道の、破格の格上げである。

【0184】入道は明石御方に「願ひはべる所にだに至りはべりなば、かならずまた対面はべりなむ、娑婆のほかの岸に至りて、疾くあひ見むとをおぼせ」といい、尼君にも「明らかなる所にて、また対面はありなむ」(104)と言った。「願ひはべる所に至りはべりなば」という条件つきであるけれども、この条件は、彼の夢見によってクリアされたも同然である。ならば、入道は、ここで明石御方と尼君の極楽往生を保証していることになる。源氏物語において、往生人は明石一族のみという発想も可能ではないか。

【0185】「そこには、思ひしやうなる御世を待ち出でたまへ」(104)。過去の助動詞「し」に、尼君の思念が籠もっている。彼女もまた、明石一族の復活に賭けた人生を送っていたわけである。

【0186】入道の愛した楽器。琴（きん）と琵琶。琴（きん）に注意したい。彼も、一昔前の楽器の王様・琴（きん）を弾いている。琴（きん）は、かつての栄華の名残。光源氏の母なる一族の記号である。これについては、すでに何度も触れた。

【0187】明石入道の「御弟子ども」は「六十余人」(105)もいたらしい。その勢力のほどがしのばれよう。

【0188】入道の遺書を持参した「使いの大徳」。彼は「童にて京より下りたりける

人」であったが、今は「老法師にな」っている(105)。もって、流れた月日の量を示して余すところがない。

【0189】明石御方のことを、このあたりは意識的に「御方」と書く。これも、明石御方の格上げであろう。もっとも、読者の方は、俗称・明石上を採用し、もっと格上げして、紫上と同格にしているけれども。

【0190】手紙を見た明石御方が、今になって初めて、父・入道の「心高くものしたまふ」(107) 事を認識する。読者も同様である。入道が、幼い明石御方を引き連れ、明石へ流浪したのは、この大目的のための流浪長征であった。明石御方、および明石女御の、明石の女という人生の傷は、こうして名誉の負傷とされてしまう。ちょうど、濡標巻の光源氏と同様の処置がなされて、明石母娘は、一挙に光源氏のレベルにまで格上げされる。これも、入道同様の破格の処置である。

【0191】明石尼君の述懐。彼女は決して惚けてなどいない。しゃんとしているではないか。「背きにし世」とある京都は、かつて若い二人にとって住みごちのよい所ではなかった。恨みの都であった、ということか。「人に似ぬ心ばへにより、世をもてひがむるやうなりし」(107)。これは、若い日の入道の様子。若紫巻における北山の噂話は、この尼君と同じレベルの情報であったことが分かる。一番身近にいた人が、この程度の情報しか持っていない。入道の秘めたる志の強さが、いまさらながら理解されよう。燕雀いづくんぞ鴻鵠の志を知らんや。凡愚の得意とすることは、結果論のみである。

【0192】「耳に近きほど」(108)。京都と明石は極めて近い。

【0193】光源氏の伝言を明石御方が尼君に伝える。「もし世の中思ふやうならば、ゆゆしきかね言なれど、尼君そのほどまでながらへたまはなむ」(109)。これは、かつて桐壺帝が桐壺更衣の母に言った言葉と同じである。⇒桐壺巻【29・35】。この尼君は、桐壺更衣の母の見果ぬ夢を見るという役どころであることが了解されよう。光源氏はそのもてる政治権力をフルに発揮して、まもなくこの若君を東宮にし、尼君の生きているうちに即位させようと考えているようである。

【0194】東宮から「とく参りたまふべきよし」(109) の催促がしきりにある。これに対して、紫上と光源氏とは積極的に応じようとしている。それに対して、明石御方も少しの養生を主張するところ、実母の感覚がよく出ている。明石女御も、この時、明石御方と同じ気持ちであったことが本文に記されている。光源氏が「かように面瘦せて見えたてまつりたまはむも、なかなかあはれなるべきわざなり」(110) というのは、興味本位の無責任な言辞というものである。

【0195】明石女御のことを「御息所」と言っている(109)。この呼称が、御子を産んだ女御・更衣に適用されることが、端的に分かる条である。母という感覚である。

【0196】明石御方が、入道の文を明石女御に見せて教訓する場面(110～1)はよい。

実母の感覚がよく出ていてゆきとどいている。⇒【0194】。「思ふさまにかなひ果てさせたまふまでは、取り隠して置きてはべるべけれど」(110)のあたり、明石御方の心の底の思いが滲み出ている。⇒【0163】。彼女には、「かばかりと見たてまつりおきつれば」(111)という自信があつての行為である。見るべきものは見た、あとは出家のみ。この発想は後の紫上のものであるが、明石御方は、すでにここで紫上より先に紫上になっている。明石御方の勝利宣言であろう。

【0197】「対の上の御心、おろかに思ひきこえさせたまふな」(111)と言う明石御方。継母が継子を苛めぬばかりか、実の子以上に育て上げた、美しい物語の帰結である。明石御方も、この点に思いをはせている。しかし、明石御方にこう言われてみると、いまさらながらに、紫上の立場の弱さが印象的である。

【0198】入道の手紙の具体的描写がある。「陸奥紙にて、年経にければ、黄ばみ厚肥えたる五六枚、さすがに香にいと深くしみたる」(111)。入道は、若い日使用していた紙を大切に保存していて、それに書いたのである。末摘花が手紙に使用したものと同じ種類の紙であることに注意しようではないか。陸奥紙は、かつての栄華を今に伝える紙である。

【0199】光源氏の言葉より、紫上が若宮を独占し、「人やりならず衣を皆濡らして、脱ぎかへがち」(112)であることがわかる。若君にお洩らしをされて喜ぶ道長の姿が『紫式部日記』に描かれている。その女性版である。紫上を道長のレベルに位置づける処置とみたい。

【0200】光源氏の明石入道評。「聖だち、この世離れ顔にもあらぬものから、下の心は、皆あらぬ世に通ひ住みたるところ見えしか」(114)。さすがに鋭い眼力である。入道を神仙の人と言っている。当たらずとも遠からずといったところである。

【0201】光源氏はかつて、明石の地で入道より昔語りを直接聞いている。⇒明石巻【46～49】。明石御方との結婚も、因縁浅からざる事情をかなりの程度承知した上で、また、だからこそ結婚にふみきったはずである。したがって、この入道の遺言も、光源氏にとっては、かなり予想されたものであったのではあるまいか。だとすれば、明石御方の言葉「御覧じとどめむべき節もやまじりはべるとてなむ」(115)は、なかなか含蓄のある言葉であろう。

【0202】再び光源氏の明石入道評。「わざと有職にしつべかりける人の、ただこの世経るかたの心おきてこそ少なけれ」(115)。入道は世渡りが下手であった。これは、伝聞情報であるけれども、入道の口から直接聞いたことも多分に含まれていたものと思われる。

【0203】「かの先祖の大臣は、いとかしこくありがたき心ざしを尽くして、朝廷につかうまつりたまひけるほどに、ものの違ひめありて、その報いにかく末はなきなり」(115～6)。この光源氏の言葉は不気味である。これも伝聞情報であるが、

明石入道の父にまつわる「ものの違ひめ」に言及したのはこれが最初で最後である。明石一族は、何かの政治的事件を引き起こしたか、事件にまきこまれたか、どちらかの運命に翻弄されたのである。明石一族の都落ちは、この事件の結果であろう。おそらくは、というよりはば間違いないく、この事件には桐壺更衣の父・按察使大納言もからんでいて私は考える。さらにいえば、六条御息所の夫となる前坊も関与し、この政変劇でもって前坊は廃太子の憂き目をみた、と見たい。六条御息所は、その廃太子、つまり「前坊」に嫁したのだと考えれば、賢木巻の年齢矛盾も解消しよう。⇒賢木巻【18】。この政治的事件は、桐壺巻から描かれ始められる源氏物語世界の前の世界、つまり、「先帝の源氏」時代に引き起こされたものである。要するに、すでに、これまで様々の細部から推測してきたごとく、『源氏物語』は天下を揺るがした事件の後から始まっているのである。ここにたって、作者は「ものの違ひめ」という一言でもって、『源氏物語』の最大の秘密を、実にさりげなく暴露した。この一言は、だから、読者のこれまでの読みを、桐壺の原点まで一旦引き戻し、そこからこの若菜のこの地点まで修整する作業を読者に強いるのである。若菜巻の恐ろしさは、まさにここにあると私は考える。そして、『源氏物語』は、「末はなき」状態から書きはじめられている物語なのだということが、いまさらながらに分かるという壮大な仕掛けが、いまここで、実に軽く表示されたわけである。

【0204】なお「ものの違ひめ」について言えば、薄雲巻に、須磨・明石の暗黒時代を将来した事件を「事の違ひめ」と表現していることが参考になろう。⇒薄雲巻【40】。すなわち、明石一族は、その昔、光源氏が須磨・明石に陥ったと同じかそれ以上の事件を引き起こしたのである。その結果、明石入道は、光源氏より先に光源氏体験をして、昔の自分に異ならぬ光源氏の到来を待ったのである。この、歴史的二重性が、源氏物語の厚み、および安定感に寄与していると私は考える。

【0205】入道の夢の部分を読んだ時の、光源氏の感想より推測すれば、光源氏にしても、ことの真相をとことん知ってはいなかったらしい。そして、いまさらながらに、須磨・明石行きの運命は、入道の夢、一族の夢の実現のためにあったことを知らしめられる。となると、すでに触れたように、光源氏の人生の疵であるはずの須磨・明石流謫事件が、運命の必然とされてしまい、疵が疵でなくなってしまう。須磨・明石の合理化である。明石御方の場合と同じ発想がなされているところに注目したい。⇒【0190】。須磨・明石事件の合理化を、作者はこの巻でとことんやって仕上げてしまおうとしている。もっとも、これは最初から目論見とされていたことで、読者が、この巻でおこなうことになる『源氏物語』の読みの修整作業の中で、それに気付くということにすぎないのだけれども。

【0206】光源氏は明石女御に語る。「あなたの御心ばへをおろかにおぼしめすな」(116～7)。紫上への感謝を忘れるな。明石御方と同じ発想をし、同じことを光源

氏が言う。⇒【0197】。このように同じ二つの言葉が近くで並べられ示されると、光源氏と明石御方とが心を同じくする実質上の夫婦で、紫上は別の領域にある人であるという印象をうける。逆に言えば、これは、光源氏を、明石御方のレベルに留めておこうという作者の意図ではないかと思いたくなる。紫上の格上げ、紫上の光源氏からの離脱、ともいえる。これは、このあたりの『源氏物語』理解のための重要なポイントであろう。

【0207】継子・継母論に託して紫上の美質を語る光源氏（117～8）。明石一族の栄華に、紫上を乗せようということだろう。紫上の保護・保全はかくして達成されるということか。

【0208】光源氏のなにげない言及。「よしとて、またあまりひたたけてたのもしげなきも、いとくちをしや」（118）。光源氏の、女三宮に対する不満である。これを素早く察知する明石御方の頭のよさは、並大抵ではない。

【0209】光源氏は、紫上を常にたてて自らは決してでしゃばらない明石御方の謙讓精神を褒める（119）。この時の、明石御方の思いに注目したい。「さりや、よくこそ卑下しにけれ」。この時、読者は、彼女の謙讓精神が生来のものではないことを知るだろう。その昔より、彼女は誇り高く、六条御息所タイプの女性であった。⇒明石巻【62】。己を殺した努力が、たまたま吉と出たのみであって、そうする戦略が彼女にあったわけではない。人生は偶然なのだ。紫上とて、昔から明石御方を許していたわけではない。「さばかりゆるしなくおぼしたりしかど」（100）と、作者は、前にしっかり書いている。これも、若菜巻の厳しさである。

【0210】明石御方の証言。「宮の御方、うはべの御かしづきのみめでたくて、わたりたまふこともえなめならざめるは、かたじけなきわざなめりかし。同じ筋にはおはすれど、今一際は心苦しく」（119～20）。女三宮は、予想どおり紫上を越えられなかったのである。このことは、もはや六条院全員の共通認識ということになっていたものと思われる。

【0211】「すべて今はうらめしき筋もなし」（120）。明石御方の人生はこのように総括される。「わが宿世は、いとたけくぞおぼえたまひける」。彼女も、花散里のように、かばかりの宿世意識で、人生の決着をつけた感が深い。

【0212】夕霧の証言。女三宮周辺の軽薄さ（120～1）。これは、次に展開することになる事件にむけての環境作りであろう。

【0213】光源氏の性格が書いてある。「ひとつさまに世の中をおぼしのたまはぬ御本性」（121）。寛大な心の持ち主である。それぞれの個性を認める。一様にする趣味はない。光源氏の愛の領域の、広大無辺さは、このような彼の性格に依るところが大きい。はたして、これを生涯貫きとおせるやいなや。

【0214】女三宮周辺の軽薄さには、光源氏も眉をひそめているが、女三宮に対する教育だけはしっかりとやっている。女三宮も「すこしもてつけたまへり」（121）

と、徐々にではあるが進歩しているのである。

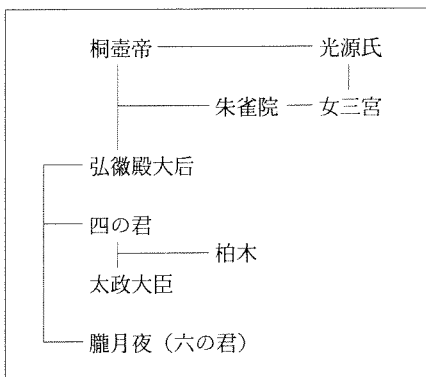
【0215】夕霧の紫上礼讃（122）。これは、彼の生涯一貫した思念。アーサー王朝時代のナイトのような思念である。野分巻より、紫上の死にいたるまで連続して止むところがない。「見し面影も忘れがたくのみなむ思ひ出でられける」（122）。

【0216】雲居雁について、夕霧は「あはれとおぼすかたこそ深けれ、いふかひあり、すぐれたるうらうじさなど、ものしたまはぬ人なり」と思う（122）。忘れられない「見し面影」の人、つまり紫上によって、雲居雁は完全に相対化させられていることが分かる。藤壺によってそうされた、夕霧の母・葵上のように雲居雁がなっているところが皮肉である。

【0217】夕霧は、かつて紫上を目撃したことがある。⇒野分巻。だから、女三宮を「見たてまつるをりありなむや」と思うのは、自然である。光源氏にそれほど愛されていないらしい女三宮に対し、「わざとおほけなき心」を使うのは、女三宮に対する愛情というものだ。とまでは、真面目な夕霧は考えないけれども、「ゆかしく思」うところで踏みとどまっている。しかし、この発想は、次にいよいよ登場するところとなる柏木のための地ならしの役目を果している。

【0218】夕霧によれば、光源氏の女三宮に対する愛情は、「人目の飾りばかり」（122）ということである。女三宮が、いつこのことに目覚めるか。これが当面の注目点である。

【0219】そして、柏木が登場する。彼が朱雀院に「親しくさぶらひ馴れたまひし人」（122）であったのは、母親の四君の関係からであろう。朱雀院と柏木とは、一世代くらい年の離れた従兄弟である。柏木は女三宮が紫上に気圧されているという風評に接し、義憤をおぼえている。自分だったら、そんなことはなかったはずだ。彼は、すでに小侍従のルートを確認し、光源氏が出家でもしたら、と考えている。この発想は、朱雀院が出家した後、朧月夜と関係をもった光源氏と同じである。光源氏にとって、反論のしにくい発想であろう。なお、小侍従は、女三宮の乳母子である。なぜ、小侍従ルートが確保できたかについては、未だ明示されていないが、そのうち明らかになる。



関係をもった光源氏と同じである。光源氏にとって、反論のしにくい発想であろう。なお、小侍従は、女三宮の乳母子である。なぜ、小侍従ルートが確保できたかについては、未だ明示されていないが、そのうち明らかになる。

【0220】しかし、光源氏の出家後を思念する柏木のイメージを、彼の親友である夕霧に重ねる時、未来への暗雲がたちこめないか。夕霧は大丈夫だと言えるかどうか。紫上は、おそらく光源氏より先に死ぬだろう、と読者はこの時予想するだろう。

うか。

【0221】女三宮は、名目的に正妻として扱われ、実質の六条院の差配は紫上によってなされている。これが世間の認識であるということを、作者は事件の記述に入る前に強調している（123）。明石御方、光源氏、夕霧、そして柏木と、このあたり執拗に、この認識が繰り返されている。このことは、柏木の発想、行為の方に正義があるという考え方に道を開くものと思われるが、どうか。

【0222】春三月。六条院における蹴鞠の場面（123～7）。いよいよ舞台が回り始める。事件のきっかけに蹴鞠をつかったのは巧妙である。蹴鞠は弁官も乱れる（125）遊びであるのだから。

【0223】場所は「寝殿の東面」（124）。三宮は、西面にいる。明石女御は若宮をつれて東宮のところへいって、東面は人少なであった。女御は結局、紫上や光源氏の意見をいれて、産後まもなく帰ったのである。⇒【0194】。

【0224】庭において、蹴鞠に参加した人々。頭弁、兵衛佐、大夫の君。これに柏木を加えて、以上が太政大臣の君達。それに夕霧。この日やって来た螢兵部卿は、光源氏と「隅の高欄」（126）に出て見物している。

【0225】柏木は、蹴鞠の名手。この日、一番目立った男（125）。御簾のうちで見ていた女房たちはもちろん、女三宮本人も強烈な印象をうけたであろうことが想像される。「ことにをささらぬけはひどもして」（126）とあるから、女三宮周辺は、そうとう興奮していたものとみえる。

【0226】小さな唐猫を、大きな猫が追い掛ける。唐猫が御簾の外に逃げ、結ばれていた綱が張って、御簾をもちあげる。そのことに、しばらく女三宮の周辺は気がつかない。蹴鞠見物に夢中であったからである（128）。このあたり、いかにも軽薄である。夕霧によって紹介された、女三宮の周辺の頼りなさ幼さが、はからずも露呈している。⇒【0212】。

【0227】猫であるが、中国で猫が家畜となったのは、前漢の頃である。唐の時代になると猫を飼うのが流行し、ほとんど家ごとに猫がいるという盛況であった。⇒『中国社会風俗史』（尚秉和）。したがって、この猫は、舶来の動物で珍重されたものと思われる。『枕草子』や『更級日記』などの記述から、当時貴族社会で猫を飼うことが盛んであったことが推測される。『源氏物語』では、ここで初めて出てくるので、この唐猫は輸入したての動物で、宮中にしかないという位置づけであろうか。長徳五年（999年）九月十九日。宮中で猫がお産をし、女院、左大臣、右大臣が産養をした。馬命婦が、その猫の乳母に任命されたことが『小右記』に載っている。唐猫は、当時珍しい存在であったと見える。渤海の使節がもたらしたものかと予測されるが、調査すべきである。

【0228】女三宮の位置。「几帳の際すこし入りたるほど」（127）。これは御簾にかなり近い位置かと思われる。これも相当に軽薄ではないか。女三宮は、面白いもの

に無邪気に反応する子供にすぎない。

【0229】時は夕方。蹴鞠の場所は「寝殿の東面」(124)。女三宮がいたところが「階より西の二の間の東のそば」(127)だから、彼女は逆光の中にいたことが分かる。「夕影なれば、さやかならず、奥暗きこちする」(128)。柏木に、顔をよく見られなかったことが逆に柏木の想像力を刺激する結果となり、悲劇の呼び水となったと考えられる。

【0230】猫がはげしく鳴いたので、猫の方を女三宮が振り向く。猫の方は、綱で御簾が開いていて丸見えの方角である。夕霧と柏木とは、絶好の位置にいて、それまで「髪のかかりたまへる側目」、つまり横顔しか見えなかった女三宮の、髪にかくれた顔を正面からまともに見る機会に恵まれたわけである。夕霧の「しはぶき」ではじめて、そのことに気付き奥に入っていた女三宮の振る舞いは、いかにも軽率。「いと端近なりつるありさまを、かつは軽々し」(129)と夕霧が思うのも当然である。柏木の女三宮に関する第一印象は「いとおいらかにて、若くうつくしの人」(128)である。柏木は完全に誤解している。これが彼の、女三宮に対する期待であった、と思っておいたほうがよいのかもしれない。ものは、期待どおりに見えるものなのである。

【0231】唐猫を招きよせて抱く柏木(129)。猫が小道具としてうまく使われている。ペルシャ猫の子猫は、ことのほか人懐っこい。

【0232】光源氏が、上達部や殿上人、つまり蹴鞠参加者を「対の南面」(129)に呼んで軽食を振る舞う。「椿餅、梨、柑子」。酒の肴は「さるべき干物」。当時の生活の一端が見え、興味深い。

【0233】ぼおっとしている柏木を見て、夕霧の女三宮に対する思い。「かかればこそ、世のおぼえのほどよりは、うちうちの御心ざしぬるきやうにはありけれ」(130)。彼の思いは一貫している。

【0234】柏木のことを「宰相の君」と書いている(130)。柏木は、すでに参議に昇進しているものと見える。

【0235】光源氏の語るところによれば、彼の生涯のライバル太政大臣に唯一後れをとったのが蹴鞠であった由(130)。柏木の腕は、父親譲りのものである。

【0236】柏木は光源氏に言う。「はかばかしきかたにはぬるくはべる家の風」(130)。藤原氏の劣勢を暗示している。光源氏も、それを認めるような冗談を言っている。柏木にとっては屈辱的な場面であったのではないかと想像されるが、今の彼には三宮の面影しかない。これでよいのかと思ってしまう。

【0237】同じ車に乗った夕霧に、女三宮と光源氏とのことを言う柏木(131～3)。柏木は、女三宮を目撃し、魅了された。だから、非常に攻撃的になっている。彼は、恐らく光源氏がこのまま女三宮に冷淡でありつづけてほしいとまで思っているにちがいない。自分の出番を一日でも早めるために。

【0238】 柏木は、プライドの高い男。いまだ独身である（133）。「わが身かばかりにて、などか思ふことかなはざらむ」と思っている。彼の中で、桐壺帝の妹である大宮を妻とした祖父左大臣の血がさわいでいるのではないか。

【0239】 小侍従への手紙（134）。これを見せられ、あの日の柏木の目撃を思い出した女三宮が、夕霧に見られぬようにせよという光源氏の注意を思い出し、夕霧があの日のことを光源氏に報告したらどうしようと恐れる。柏木のことなど何も考えようとしない。何という頓珍漢。何という幼さ。こういう女三宮が身を全うすることは、ちょっと考えにくいのではないか。

【0240】 しかし、光源氏が女三宮に、夕霧に気をつけよと言っているのは、彼女を紫上なみに扱っている証拠でもある。このまま推移すると、老いることはあっても若返ることのない、頂点を越えた紫上を、未来だけしかない女三宮が凌駕する日が、確実にやってくるだろうことは、充分に予測できることである。さて、どうなるか。

（下）

【1】 冒頭の一文は、上巻にダイレクトに接続する。若菜巻を上下に分けたのは、単に分量の問題だということを、これは示している。若菜は一挙に読むべし。上下別々の世界ではない。

【2】 光源氏に対して「なまゆがむ心」（139）を持つにいたる柏木の記事から、若菜下巻は始まる。いよいよ本筋である。

【3】 三月晦日。六条院の競射（139～40）。左右大將は、髭黒と夕霧。衛門督は柏木。競射に打ち込む髭黒と夕霧を背景に、女三宮を思っとうじうじしている柏木の前景は、柏木を著しく、権力構造から落ちた若者の風姿として思うがどうか。

【4】 そういう柏木を見て、「わづらはしきこと出で来べき世にやあらむ」と思う夕霧（140）。惨劇の予告だろう。

【5】 髭黒は、玉鬘との結婚以来、光源氏に擦り寄り、今では完全に身内同然の関係となっている。一時は、柏木の家・内大臣だけが頼りであったにもかかわらず、機を見るに敏な男である。もっとも、光源氏にしても、東宮の叔父で、東宮の実質的後見の立場にある髭黒は、明石姫君東宮入内との絡みで、かれを身内とせざるをえない事情がある。当初は氣にくわぬ相手であったのに。変われば変わる、あやくな世の中である。

【6】 まず女三宮の、あの猫を手に入れようとする柏木。猫は彼の異常性、その妄執ぶりを示す効果抜群である。先ず猫、次に女三宮。というラインが見える。

【7】 弘徽殿女御は、久しぶりの登場である。たしなみぶかい妹君から、女三宮の

軽率さを類推してもよからうに、それが出来ぬ柏木（141）。恋の闇の中に彼がいるからである。

【8】猫であるが、「内裏の御猫の、あまた引き連れたりけるはらからどもの、所々にあかれて、この宮にも参れるが、いとをかしげにてありく」（142）という記述からみて、内裏にしかいなかった貴重な猫が、はじめて他家に分散してゆく様が見て取れる。『枕草子』の記事なども勘案すると、日本においては、一条天皇の時代になって初めて猫が愛玩動物としての地位についたというべきか。「唐猫の、ここのに違へるさましてなむはべりし」（142）という柏木の言葉より、和猫も相当いたらしい。唐猫がブームとなりつつあった時代と考えておいたほうがよいか。渤海国との交易の結果であろうと推測される。⇒若菜上巻【0227】。源氏物語においては、東宮が相当の猫好きである。

【9】朱雀院は、子供の頃から柏木を可愛がっていた（143）。ならば、何故に女三宮の結婚問題が発生した時点で、せめて夕霧を考えたほどに考えなかったのか。疑問が残る。やはり、最初から光源氏以外眼中になかったからだとも思えない。

【10】柏木に計られて、女三宮の猫を手に入れた東宮が「ここなる猫ども、ことに劣らずかし」（143）と、軽く失望しているのは、正直な感想である。その猫を手にした柏木とて、自分の行為を反省している。「心のうちに、あながちにをこがましく、かつはおぼゆ」（143）。猫騒動は、馬鹿馬鹿しいかぎり。その馬鹿馬鹿しさが、真面目なものとなる未来の、これは不気味な予告と読むべきでかもしれない。

【11】猫を小道具に使ったのは、その鳴き声ゆえか。「ねうねう」を「寝む寝む」と聞く柏木の場合がある（144）。その鳴き声に、だんだんと柏木がつき動かされてゆくという展開であろう。

【12】場面は、ここで一転して、玉鬘周辺に及ぶ（143～9）。これは、本筋の補強工作であろう。

【13】玉鬘の性格。「心ばへのかどかどしく、気近くおはする君」（144～5）。彼女は、前からそうであったが、実の兄弟より、夕霧のほうに親しい。夫と同じ行動様式。夫婦仲もうまくいっている。⇒【5】。

【14】真木柱の姫君の登場。読者の意識を、真木柱巻まで一旦引かせる。玉鬘と髭黒との結婚が、元北方の狂乱の場を生み、式部卿家を破壊したイメージである。玉鬘の登場は、女三宮の、これから起こる悲劇の予行なのである。玉鬘に女の子がいないから、この真木柱をひきとり、彼女を玉鬘の養女にするという髭黒の申し出は、いかにも自分勝手である。式部卿が断るのも当然というもので、どうも髭黒は、人望に欠ける男らしい。信用できかねるタイプである。髭黒は、この真木柱をどうしようと思っているのであろうか。後宮政策のためか。

- 【15】式部卿の権力。帝への影響力は絶大である。母・藤壺方の叔父であるということと、宮女御の存在という両方の事実から権力は発生している。式部卿は「院、大殿にさしつぎ」の権力、第三位の力を有する。髭黒より上の権力者だということをおさえておきたい。髭黒は将来はともかく、現在は「さる世のおもしろとなりたまふべき下形」(145～6)といったところである。
- 【16】真木柱の結婚問題に式部卿は心を傷めている。柏木が希望だが、柏木にその気がない。「猫には思ひおとしたてまつるにや」(146)という表現は笑える。
- 【17】髭黒大將元北方の現状。「あやしくなほひがめる人にて、世の常のありさまにもあらず」(146)。気の毒だが、相変わらずのようである。「世の常」の人、という発想からいけば、「世の常の人」になっている玉鬘をはさんと、光源氏の世界と元北方の世界とは、バランスがとれているという見方はひどすぎるだろうか。
- 【18】真木柱は、祖父の意思とはうらはらに、玉鬘に関心がある。彼女のひととなりは「今めきたる御心ざま」(146)の人で、継母問題なんて気にしないタイプ。きさくな人柄のようで、もし、髭黒に引き取られたら、玉鬘とは馬があいそうである。二人はタイプが似ている。
- 【19】蛭兵部卿の登場。ますます玉鬘物語である。彼が、真木柱姫君と結婚する。そして、不調。この結婚、式部卿家が力を入れた分だけ、式部卿家は屈辱を味わう。継子いじめ物語の後半、いじめ返しの図といったところか。この、式部卿家の小さな悲劇は、まもなく引き起こされる朱雀院一統の悲劇の予兆となる。
- 【20】蛭兵部卿の求婚に際して、二つ返事で受けた大宮・式部卿の意見に注目したい。「かしづかむと思はむ女子をば、宮仕へにつぎては、親王たちにこそは見せたてまつらめ。ただの人の、すくよかになほなほしきをのみ、今の世の人のかしこくする、品なきわざなり」(146)は、「すくよかになほなほしき」髭黒のごとき男を意識した発想である。二心なき愛より、花心のある光源氏の愛への賛同。式部卿も古い人なのである。
- 【21】しかし、この結婚は不調に終わる。兵部卿が「亡せたまひける北の方」に似た人をひたすら求めていたためである。真木柱はタイプが違っていたのである。兵部卿の先妻は、朧月夜の姉で、美人の評判の高かった人である。兵部卿は面食いなのである。⇒花宴巻【15】。
- 【22】光源氏と蛭兵部卿とは「いたく色めきたま」うという花心の類同性があり、蛭兵部卿の、この不調振りは、そのまま光源氏の世界の黄昏を暗示するものと考えられる。二人は、新しく結婚し、失敗したという点で連結しているのである。
- 【23】玉鬘の感慨。蛭兵部卿と結婚しなくてよかった。不幸は式部卿家に集中する。やはり、苛め返しか。先に述べたように、真木柱と玉鬘とは同じタイプの女であったのだから、もし、玉鬘が蛭兵部卿と結婚していても、結果は同じであったに違いない。⇒【18】。玉鬘は、運がよかったのである。さらに考えを進めてゆくと、

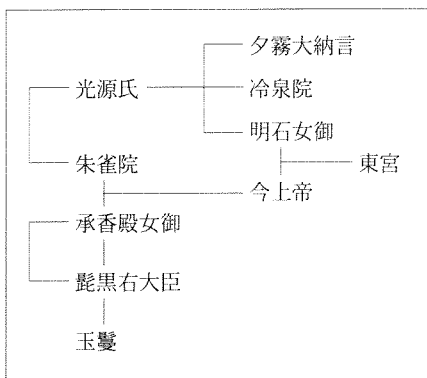
蛭兵部卿と光源氏とは同じタイプである。もし、玉鬘が光源氏と結婚していたら、
 というように考えるのは、読者の自由だけれども、作者がそこまで要求している
 かどうかは、よく分からない。

【24】本音の人・大北の方の意見。「親王たちは、のどかに二心なくて見たまはむ
 をだにこそ、はなやかならぬなぐさめには思ふべけれ」(149)。これに対して、
 「いと聞きならはぬことかな」と蛭兵部卿が反発している。親王こそは、花心の
 人であるはずだと彼は思っていて、大北の方発言は心外の発言であると彼は認識
 している。だが、大北の方の意見に着目すると、親王の経済的不如意が、こうい
 う愛の世界を成立させている姿が透けて見える。兵部卿の心理的反発も、そこに
 根ざしているのではないかと推察される。「はなやか」な人は、花心を有して当
 然なのである。という意見である。われわれ読者としては、このところは、光
 源氏の権力世界から疎外されて、不如意な生活を強いられている親王、例えば、
 宇治八宮のような人を想像すればよいのかもしない。さて、それはともかく、
 大北の方の言葉を通して、二心ない愛の世界の提示が、確然としてここにあると
 いう事実が重要である。これは、明らかに反光源氏的世界の提示である。かつて、
 玉鬘の結婚問題に際し、光源氏の脳裏をかすめた想念でもある。⇨常夏巻【32】。
 これが、蛭兵部卿にも適用されようとしているところに、貴族世界の黄昏が暗示
 されている点に着目しようではないか。光源氏の世界は、いうなれば、貴族の夢
 の、最後の砦なのである。これから、光源氏世界のカタストロフィーを語る前に、
 これを語った作者の意図を見逃すべきではない。

【25】兵部卿と真木柱は、しかし、別れてしまったのではない。なんだかんだとい
 いながら、二年もすれば慣れてゆき、不調ながらも夫婦としてずるずると暮らし
 てゆくことになる。このあたりも、「世の常」のリアルな展開である。

【26】「はかなくて年月もかさなりて、内裏の帝、御位に即かせたまひて十八年に
 ならせたまひぬ」(149～50)。と本文にある。実は、ここに四年の空白が設定さ
 れている。読者は気付くだろうか。ちょっと無理なのではないか。作者も、じわじわと気付く手法を導入
 している。その方が、とりかえしのつかない年月の迫力が出る、
 と考えたのだろう。

【27】冷泉帝の十八年間は、須磨明
 石から復活して以来の、光源氏全
 盛時代の年数である。が、冷泉帝
 退位に際し、光源氏の孫である
 「六条の御腹の一の宮」が東宮に



就任したのであるから、光源氏の時代は、まだまだ上昇気配である。栄耀栄華の坂道はどこまでも続き、このまま推移せんか、死亡の日まで続きそうな勢いである。

【28】新しく右大臣となった髭黒の立場は、案外に安定している。妻が玉鬘。夕霧とは、かつての部下で気心が知れている。権力の源泉である帝のもとには明石女御がいる。髭黒は、光源氏の勢力と巧みに連携しているのである。⇒【5】。

【29】太政大臣の致仕。これは、藤原氏の衰退を意味しよう。柏木が要職についた記事が見えない点にも注意したい。太政大臣の致仕理由（150）は綺麗事で、実は不満であったのではないか。これから語ることになる柏木の行動の根に、藤原氏の憤懣があったとみるのはがちすぎか。柏木に、業平の、やぶれかぶれのイメージを与える意図を作者が持っていたのではないかと推測されるがいかが。

【30】今の帝の母、承香殿の女御が既に死んでいるという事実（150）。「ものの後のここち」という表現は面白い。これは、明らかに、後宮政治の主役として、これから明石女御が位置づけられるという環境整備であろう。

【31】光源氏が、冷泉院に後継ぎがないということに不満をもっていることは注目される。これは、彼の権力欲の物凄さを示しているというべきであろう。普通なら、罪を隠しおおせた幸せをかみしめるところだけでも、彼の場合、「末の世まで」自分と藤壺との血脈を「え伝ふまじかりける御宿世」が「くちをしくさうごうし」（151）いのである。盗人たけだけしい発想ではないか。彼は増上慢におちいつている。まもなく、鉄槌がくだされるのは、けだし当然といえようか。

【32】「春宮の女御は、御子たちあまた数添ひたまひて、いとど御おぼえ並びなし」（151）。四年の空白のうちに、明石女御は御子たちをさらに生み続けたものとみえる。匂宮はすでに生まれているのだろうか。

【33】源氏の栄華に対する世間の不満（151）。特に、后が二代にわたって続きそうなことが関心を集めている。藤壺から勘定すれば、光源氏方の中宮が三代続くことになるのだから、異常である。やはり、致仕の大臣の行動には、裏があったというべきである。⇒【29】。

【34】秋好中宮の、光源氏に対する感謝の気持ち（151）。彼女が、源氏であるというのは、光源氏の養女、あるいは父が親王ということから来ているのだと思うが、ひょっとして、六条御息所の家が源氏であった可能性も捨てきれない。はたしてどうか。

【35】女三宮は、依然として紫上以上の存在にはなれずにいるという記事（152）。四年の歳月は、三宮に有利に働くはずなのにそうならない。真木柱のことを前に書いておいたことが、ここで生きる。女三宮の行く手には、不満ながら流されてゆく真木柱の人生がまっているということを匂わせることが出来るからだ。⇒【25】。

【36】紫上の言葉は、不気味である。「この世はかばかりと、見果てつるこちする齢にもなりにけり」(152)。冷泉院の、十八年在位という時間は、紫上の人生にも重く重なり、彼女の衰えることのない美しい人生も、そろそろ黄昏てゆく現実、読者はいまさらながら気付くことになる。彼女は、いまいくつになっているのだろうか。まもなく、それも分かる。

【37】紫上は出家を願ひ出るが、光源氏が許さない。このパターンは、彼女が死ぬまで続く。

【38】明石女御は、紫上を「まことの御親にもてなしきこえたまひて」(153)、明石御方は「隠処の御後見」として「卑下し」ているという状態である。これが、今だけのものか、永続的なものか、予断をゆるさない。というのは、いま立后問題が浮上している最中なのだから、明石一族は自重が肝心の時であったからである。計算してやっているとしたら、ちょっと怖いけれども。明石御方の方は、案外したたかな戦略があるのかもしれない。

【39】明石御方のことを、作者は「なかなか行く先たのもしげにめでたかりける」(153)と書く。勝利の予感である。明石尼君もまだ死んでいない。彼女たちは、承香殿女御とは違うのである。⇒【30】。

【40】次に描かれる明石一族の記事を見よ。紫上は落日のイメージ。明石一族は旭日昇天の勢い。あまりに対照的ではないか。

【41】「十月中の十日」。住吉詣での記事(153～61)。住吉詣では、潯標巻以来である。なお、この住吉詣では、時期が時期であるから、明石女御の立後のための祈願の意味もこめられていたとみるべきである。立後のために、さらなる龍宮パワーの注入を作者は図っているのである。

【42】明石入道の神格化。「さるべきにて、しばしかりそめに身をやつしける、昔の世の行ひ人にやありけむ」(153～4)と光源氏は思う。権現思想である。上巻で行った薩埵太子のイメージ作戦の延長線上の処置である。⇒若菜上巻【0183】。

【43】紫上が、明石一行の住吉詣でに同行する。これは、象徴的処置ではないか。紫上は、これから明石一族の栄耀栄華の上に乗って、生涯を終えるということだ。⇒若菜上巻【0207】。

【44】左右大臣を除いた「上達部」全員参加の住吉詣で(154～61)。光源氏一族の栄華の極みである。光源氏はこの時、ほとんど天皇に異ならない。この住吉詣では、龍宮から来た明石女御が、錦を着て故郷へ帰るという含意があると思う。

【45】紫上の位置づけ。明石女御との同車。お供の女房車の数も女御と同じく五つ。彼女もまた、この時、ほとんど后に異ならない、ということである。

【46】明石尼君の同行。彼女の数奇な人生も、ここに極まる。「いみじかりける契り、あらはに思ひ知らるる人の御ありさまなり」(156)。彼女は、明石入道の人生を継ぎ、彼に成り代わって栄華を確認する人である。⇒【39】。

【47】明石尼君同道を言う光源氏に対して、明石御方は「かくおほかたの響きに立ちまじらむもかたはらいたし。もし思ふやうならむ世の中を待ち出でたらば」(155) といって一旦断っている。この明石御方の「もし」云々に注意しておこう。彼女はなかなかどうして政治的な女性なのである。⇒【38】。

【48】光源氏は、住吉の社頭で、須磨明石の昔を「目の前のやうに」回想している。そして、「致仕の大臣をぞ、恋しく思ひきこえたまひける」(157) とある。昔を語れる人が、もう彼以外いない現実の表示か。それとも、親友を圧倒しやり、失意に追い込んだ慚愧の思いの表示であろうか。

【49】明石尼君は、光源氏と贈答したあと、「昔こそまづ忘れられね住吉の神のしるしを見るにつけても」(158) とひとりごちた。彼女は、光源氏よりさらに一昔前を回想している。その内容に触れないのは憎い処置である。彼女は、桐壺更衣の母の、見果てぬ夢、挫折した夢をいま見ているのである。

【50】住吉詣での正確な日付は、十月二十日。

【51】六条院の庭しか見ていない紫上が住吉の海を見る。六条院が融の河原院のイメージだとすれば、六条院の池は海で、連続性が生じる。河原院が塩釜のミニチュアだとすれば、六条院は住吉の景を模したものと考ええると面白い。そこまで書いていないけれども、そういう発想であろう。ところで、紫上の洛外への他出だが、少女時代の、北山以来なのではないか。「御門より外の物見、をさをさしたまはず、ましてかく都のほかのありきは、まだならひたまはねば」(158) と本文にある。

【52】明石御方のことが、この盛大な場面ではほとんど語られていないという点も注目されよう。彼女は彼女らしい生き方をしつづけていることが確認される。漣標巻で、とことん知らしめられた光源氏との身分的落差。いま、彼女は、その光源氏の栄華のレベルに達しているのであるから、感慨ひとしおであったろうと想像される。なのに作者は、彼女に焦点を合わせようとしない。紫上への配慮かもしれない。しかし、「めざましき女の宿世かな」(160) と陰で皆噂する明石尼君の幸福を書けば、彼女の幸せは推して知るべしということであろう。皆まで言うのは下根の沙汰だということであろうか。

【53】「世の中の人、これを例にて、心高くなりぬべきころなめり」(161)。長恨歌の楊貴妃の例に明石一族をなずらえる視点である。長恨歌の利用は、こちらが本筋であったのではないか。桐壺巻の流れがここまで続いて、ここで完結しているような感覚にならないか。事実、その通りなのである。失脚しない点のみが楊貴妃との決定的な違いであるけれども。

【54】双六を打つ時、「明石の尼君、明石の尼君」と念じる近江君の言葉で、この住吉詣での盛儀は閉じられる。近江君は正直にして本音の人で、決して嘘をつかない人である。ここに、まぎれもなく「幸ひ人」(161) 明石尼君のイメージが確

定する。桐壺更衣の母の、見果てぬ夢の完結である。

【55】朱雀院は仏道三昧の日々を送っているようである（161）。若菜上巻では、いまにも死にそうな様子であったのに、意外に元気である。この元気が、悲劇をよぶことになるのは皮肉だ。

【56】女三宮が二品に叙せられたという記事（161）。女三宮も、いつまでも子供ではない。徐々にではあるが、その周辺の力と、自らの力によって重々しい存在となっていくのである。

【57】明石一族の栄華、そして女三宮の成長。紫上の不安は募る。出家願望の強まりは当然であろう。「わが身はただ一所の御もてなしに、人には劣らねど、あまり年積もりなば、その御心ばへもつひにおとろへなむ、さらむ世を見果てぬさきに、心と背きにしがな」（162）。これが、紫上の悲しい現状である。そして、ついに運命の時が来る。朱雀院への配慮故とはいえ、光源氏が女三宮のところへ「わたりたまふこと、やうやうひとしきやうになりゆく」（162）時がやって来た。紫上は、女三宮に並べられたのである。このまま推移せんか。抜き去られるのは、年齢からいって時間の問題であろう。四年の空白の設定は、実に、この二人の女の差を一挙に無くしてしまう仕掛けであったと知れる。女盛りに向かう女と、衰亡に瀕する女。女一宮の世話で「つれづれなる御夜がれのほどもなぐさめたまひける」（162）紫上の姿は、衰れをかもす。

【58】花散里の日常（162～3）。彼女は、このまま夕霧の世話をうけ、幸せに人生を完了しそうな雲行きである。

【59】紫上も、花散里も、光源氏も「孫あつかひ」。ずいぶん六条院も老化が進んだ感じがする。これもみな、四年の空白がもたらしたものである。

【60】髭黒は、光源氏に頼り、光源氏のバックアップを力に政治力を発揮していることがうかがえる。こういう虎の威を借る狐みtainな政治家には人望は望めまい。竹河巻で、髭黒の死後、玉鬘が苦勞するのは、このせいであろう。

【61】玉鬘も、いまは幸せ。光源氏は、昔の光源氏ではない。紫上との対面をはたし、六条院へも気軽に来れる。彼女も夫の政治を助けているものと知れよう。

【62】つまり、光源氏の周辺においては、女三宮のみが「幼からむ御女のやう」な状態にあり、それ以外の方々は、落ち着いているのである。一応の平和が達成されているという時点が今なのである。

【63】朱雀院は、死期が近いことを知り、女三宮との対面を願う。この調子では、極楽往生は難しいのではないかと懸念される。死に際しての、宇治八宮の態度との対比で考えればよい。八宮の方がよほど優れている。それでも、八宮は、往生に失敗しているのである。

【64】朱雀院の願望をいれ、六条院で、親子対面を実現することとなる。その対面にかこつけて五十賀をする。「若菜など調じてや」（164）と光源氏は考える。第

二の若菜である。⇒若菜上巻【73】。

【65】朱雀院の五十賀の準備。特に舞樂の準備に忙殺されている様は、かつて朱雀院の行幸の準備に天下がわきたっていた時と同じである。あの時は、若菜巻や末摘花巻で徐々に鳴り物を響かせ、紅葉賀巻で一挙に展開した。光源氏青春時代の最大のイベントであった。夢よもう一度、である。あの時、準備の様を、噂ばかりで具体的に描かなかったのは、ここで描くためにわざわざ描かなかったのだろうか。だとすれば、作者の構想のスケールは、ただごとではない。

【66】舞人、楽人の選定（164～5）。髭黒が、光源氏にとりいつている様がみてとれよう。「右の大殿の御子ども二人」は、若菜上巻で、玉鬘が連れてきた子供である。あれから大分経っていて、あの子供らが舞人をつとめられるほどになっているのである。

【67】ここで注目されるのは、柏木たちが除外されていることである。光源氏の身内の行事ではあるけれども、音楽の達人である柏木など呼んで指導をあおいでもよいではないか。昔の朱雀院行幸の時は、光源氏も頭中将も肩を並べて主役だった。相当の様変わりである。藤原氏正統は、いま光源氏や髭黒によって徹底的に冷飯を食わされているのではないか。などと想像したくなってくる。

【68】女三宮に琴（きん）を伝授する。光源氏にとって、琴（きん）は特別の楽器である。明石女御にも紫上にもまだ教えていない。朱雀院は、女三宮に琴（きん）を教えていた。琴（きん）の名手である光源氏のもとにいる女三宮の琴（きん）が聞きたい、という朱雀院の内意。これが帝に伝わり、光源氏に伝わる。帝も興味を持っている。光源氏としても、たとえにわかであっても、本格的に琴（きん）を伝授せざるをえない状況となる。明け暮れ女三宮の側において、秘曲を伝授する光源氏。女三宮への愛が最高点に達したのは、この時である。紫上には「御暇聞こえたまひて」（166）と本文にある。

【69】光源氏が、明石女御や紫上をさしおいて、女三宮に琴（きん）を教えるということは、格別の意味があると考えるべきである。光源氏の正統な後継者としての、女三宮の格上げである。ちなみに、「などてわれに伝へたまはざりけむ」（167）と明石女御が恨む場面がある。

【70】明石女御も六条院に帰ってくる（166～7）。女三宮の琴（きん）が聞きたいためである。賀にむけて、最高の陣容が整ったことになる。なお、明石女御は、ただいま二人の子持ちだとあるが、この数は不審である。さらに三人目を懐妊中である。これが、匂宮と判断してよいか。匂宮は、薫より年上である。

【71】朱雀院の五十賀は、二月十余日と決定する（168）。読者は覚えているだろうか。この日は、光源氏と女三宮の結婚記念日である。⇒若菜巻上【86】。

【72】琴（きん）は、この頃「さらにまねぶ人なくなりたり」（168）という状態であった。「この御琴の音ばかりだに伝へたる人、をさをさあらじ」と光源氏は

女三宮に言う。特訓のかいあって、正月の段階で、女三宮は免許皆伝の腕に達したものと見える。

【73】女三宮は「二十一二ばかり」。女盛りにむかう頃である。「なほいとみじく片なりに、きびはなるこちして、細くあえかにうつくしくのみ見えたまふ」(169) 状態である。

【74】正月二十日。六条院で女楽がおこなわれる。紫上が女三宮の琴(きん)を聞きたがっているためにおこなわれた(167~8)催しである。「試案めきて人言ひなさむ」(169) と、光源氏はいみじくも言った。この女楽こそ、かつての紅葉賀巻の試案に異ならない。あの時は、行幸に参加できぬ藤壺のために催した試案であった。いま、紫上は、かつての藤壺の位置にいる、というべきか。あの時は秋。今回は春。春は紫上の季節である。

【75】この女楽こそ、六条院最後の平和。光源氏最後の栄光の時となる。このことは、誰も知らない。

【76】六条院の寝殿に参加した童女の、絢爛たる装い。作者は蘊蓄を傾けて描写するが、われわれが明確に映像化できぬのは残念の極みである。

【77】拍子合わせには童。簀子に、笙の笛、横笛をもって控える。可愛い図である。

【78】明石御方が琵琶。紫上が和琴。明石女御が箏の琴。女三宮が琴(きん)。六条院の主役、オールキャストである。花散里と秋好中宮が入っていない。彼女たちは退役感覚があるから避けられたのであろうか。明石御方が確固たる地位を占めているところにも注目したい。住吉詣でで目立たなかった分を、ここで取り戻している。⇒【52】。

【79】明石御方や紫上、明石女御が、それぞれ「ことことしき琴」を用意したのに対して、光源氏は、女三宮に気をつかい「例の手馴らしたまへる」楽器を用意したとある。このあたりに、光源氏の女三宮に対する愛情がにじんでいる。彼は、余計な依怙最良をしているのである。その実、紫上の和琴を心配している(172)。ならば、紫上をそうすべきではないのか。もっとも、紫上をそうするわけにもゆくまい。彼女はもういい年なのだから。

【80】夕霧が呼ばれる(171)。彼の登場は、紫上の引き立て役であろう。何せ、彼は紫上至上主義者だから、紫上の音だけに耳を澄ませ、紫上だけを褒めるにきまっているではないか。

【81】事実、合奏が始まるや、一番目立ったのが、最初光源氏が心配していた紫上の和琴の冴えであった。夕霧が、はなから「和琴に、耳とどめ」ていたのだから、これもいたしかたなかるう。考えてみれば、この女楽の場こそ、紫上の最後の栄光の時でもあったのだ。

【82】光源氏による、六条院女楽のスタッフの印象を列挙すれば、

女三宮=二月の中の十日ばかりの青柳の、わづかにしだりはじめたらむこちして、鶯の羽風にも乱れぬべく、あえかに見えたまふ。

明石女御=よく咲きこぼれたる藤の花の、夏にかかりて、かたはらに並ぶ花なき朝ぼらけのこち

紫上=あたりににおひ満ちたるこちして、花といはば桜にたとへても、なほものよりすぐれたるけはひことにものしたまふ。

明石御方=五月待つ花橘、花も実も具しておし折れるかをりおぼゆ

【83】この、光源氏の目による女方の紹介は、野分巻で、夕霧が六条院の方々を垣間見た時の印象を彷彿させるものである。紫上和明石女御の印象が、あの時と連続している。この事実が、ますますその印象を強める。夕霧がすぐ側にいるというこも、野分巻のイメージを喚起させよう。

【84】光源氏の印象は、含蓄が深いというべきである。女三宮の「鶯の羽風にも乱れぬべく」は、今後の展開の不気味な暗示となっている。明石女御の権勢ならびなき現状は、「かたはらに並ぶ花なき」におしこめてある。明石御方の神仙的雰囲気も、橘で充分フォローしている。花も実もある彼女の人生そのままである。

【85】夕霧の紫上に対する思いは、かつての光源氏の藤壺への思いに近い。が、「あながちに、あるまじくおほけなき心などは、さらにものしたまはず、いともておさめたり」(177)でもって、紫上が藤壺になる運命は閉ざされたというべきであろう。

【86】光源氏と夕霧との春秋の論(178)。「女は春をあはれぶと、古き人の言い置きはべりける」という夕霧の言葉は、まったくの紫上礼讃である。この、春の女楽は、女三宮の栄華というより、むしろ紫上の最後の栄光なのだと考えたほうがよいのかもしれない。

【87】当代の名手論。衛門の督、つまり柏木の和琴。蛭兵部卿の琵琶(179)。致仕の大臣も和琴の名手。和琴は柏木の家芸なのである。作者は、このあたりで、そろりとこの巻の主人公を出している。

【88】夕霧は、和琴にかこつけて、紫上を褒めるばかり。光源氏は、琵琶を語り、明石御方をフォローする。このあたり、二人の心理の綾が面白い。光源氏が明石御方を評して「もののけはひ異なるべし」(180)と別格論を展開するのは、自然である。明石一族住吉詣での余韻は、この、異界から来た人というイメージでもってもう一度強調されることになる。明石御方は、もう落ち着くところに落ち着いて、微動だにしない雰囲気である。

【89】つづいて、光源氏が琴(きん)論を実に長々とやる(181~3)。琴(きん)は、すなわち女三宮。これは、だから光源氏の、女三宮への愛の表白であろう。女三宮の人生の頂点は、後から思えば、まさにこの時であったのである。

【90】この光源氏の琴(きん)論でもって、琴(きん)のことは、皆尽きている感

じがする。光源氏が、この琴（きん）に終始こだわりをみせたのは何故か。その昔、かの地に渡り、艱難辛苦これをマスターした者は、『宇津保物語』の俊蔭巻にあるような奇跡瑞祥をもたらした。いわば神仙的楽器である。「天地をなびかし、鬼神の心をやはらげ、よろづのものの音のうちに従ひて、悲しび深き者もよろこびに変わり、賤しく貧しき者も高き世にあらたまり、宝にあづかり、世にゆるされたるたぐひ多かりけり」（182）。にもかかわらず、「これを弾く人よからずとかいふ難をつけて、うるさきままに、今は、をさをさ伝ふる人なし」（182）という状態になっている。今は誰も弾かない、あるいは弾けない楽器。弾くと不幸になる楽器というあらぬ理由が付けられた運命的楽器が、琴（きん）なのである。琴（きん）は、だから不幸の記憶をともなった楽器であるということができよう。これにこだわる光源氏は、琴（きん）の鳴っていた時代、それは、恐らく琴（きん）とともに忘れたいと世の人が思っていた、まさにその時代にこだわっていたのだと考えるのが自然である。琴（きん）は、和琴、つまり日本の琴ではない。いうまでもなく大陸文化の精髓をなす楽器である。大陸文化に酔いしれた一つ前の時代へのノスタルジア。これは、学者の娘であった作者自身の個人的好みも多分に投影していよう。しかし、われわれ読者には、このあたりで、末摘花の父・常陸宮のこと、あるいは、北山僧都や明石入道、さらには按察使大納言のことなどがしきりに思い出される。桐壺帝以前の時代、ということは『源氏物語』以前の時代ということになる。『源氏物語』から推測するに、藤壺の父・先帝の時代は、まさにそういう時代であったのではないか。この推測は、平安時代の歴史的推移ともきちんに対応している。嵯峨王朝から醍醐王朝への流れ、大陸文化から国風文化への歴史的潮流である。光源氏という人物は、琴（きん）と同じように、大陸文化時代の名残を伝える、ほとんど唯一の存在ではなかったか。という発想からすれば、琴（きん）は、まさに光源氏のアイデンティティ、光源氏一族の記号となる。そう思っているのではないか。これを、今、女三宮に伝える。この意味は極めて大きいとみるべきである。そして、これを将来「三の宮」（183）に伝えようという光源氏の言葉を聞いた明石御方が、感激の涙をこぼす。明石御方には、琴（きん）の意味が分かっているのである。

【91】ところで、この明石女御腹の「三の宮」とは、誰のことか。東宮が三宮なのか。あるいは、匂宮か。【70】によれば、明石女御の御子は二人。東宮ともう一人は、紫上が世話をしている女一宮。三宮などいない。【32】と【70】とは、矛盾しているようで、理解に苦しむ。後考に備えたい。

【92】光源氏の琴（きん）論のなかにある「これを弾く人よからず」には、もう一つの表層的理解が必要である。女三宮の、これからの運命の予告である。この楽器は、「なまなまにまねびて」は「思ひかなはぬ」（182）楽器であって、奇跡瑞祥は期待できない楽器だ、とある。おさえておきたい点である。

- 【93】箏琴を女御より譲られた紫上、紫上の和琴は光源氏。琴（きん）はそのまま女三宮で、葛城の演奏（183～4）が軽くなされる。箏琴の素晴らしさ。夕霧は例によって感動にうちふるえたらしい（186）。一方、光源氏は、女三宮の腕に満足する。光源氏が、この夜、終始女三宮の側に立っている点を見逃すべきではない。女三宮、最良の日であろう。
- 【94】女三宮から「いみじき高麗笛」（185）をもらって吹く光源氏。夕霧も息子の吹いていた横笛を鳴らす。この笛の挿話、横笛巻にかかってゆくものであろうか。
- 【95】夕霧は帰る道すがら紫上のことを思っている。「箏の琴のかはりていみじかりつる音も、耳につきて恋しくおぼえたまふ」（186）。恐らく、この夕霧の紫上思慕がなければ、この日、紫上は救われようがなかったのではないか。紫上は、夕霧の最良によって、この日ようやく面目をほどこし女三宮と対等でいられたのだとさえ考えられよう。
- 【96】雲居雁のことが、ちらりと書いてある。子供を沢山生んで、子育てに忙殺されている様子である。主婦にすっかりなってしまったものとみえる。「さすがに腹あしくて、もの妬みうちしたる、愛敬づきて、うつくしき人ざま」（186）。どうやら作者は、夕霧巻の構想をほぼ固めているらしい。
- 【97】光源氏が先に対に帰る。紫上は、女三宮と話をして、暁に帰る。二人は「日高うなるまで大殿籠」（186）もる。久しぶりの共寝ではなかったか。⇒【68】。さて、以下に展開される長大な六条院女性批評（186～93）は、二人の人生の総括ともいうべきものである。
- 【98】琴（きん）を教えるということは、「うるさくわづらはしくて、暇いるわざ」（187）であるから、他の方々には教えていない。帝や朱雀院の要望にやむなく、女三宮に伝授したのだ。と光源氏は言う。女三宮が、光源氏にとって特別の女であることの、これはさりげない記述である。
- 【99】光源氏は、夕霧が紫上の琴を絶賛したということを披露し、「思ふやうにうれしくこそありしか」（187）と無邪気に喜んでいる。が、その夕霧絶賛の意味するところを、彼は把握していない。迂闊である。
- 【0100】光源氏の紫上に対する感謝の思い（187）。「いとかく具しぬる人は、世に久しからぬ例もあなる」（188）。なにやら、紅葉賀巻の時の光源氏みたいに紫上を描写しているが、この条は不気味で、紫上の死が近いことを匂わす表現である。天女昇天。そうしておいて、「今年は三十七にぞなりましたまふ」と厄年宣言をやるわけである。
- 【0101】紫上の年齢、三十七歳。若紫巻の登場時が「十ばかりにやあらむ」であった。玉鬘巻に二十七八歳とあった。⇒玉鬘巻【57】。あれから十年が経過しているのである。三十七歳では、いかな紫上の美貌とて、そろそろ限界状況を呈するのではないか。それにしても、この年齢は、藤壺の死の年齢である。もし、この

歳で紫上が死ねば、紫上は藤壺のイミテーションということになる。はたして、作者がそうするか。まあ、しないだろう。そんなことは、誰でも予想できる。

【0102】「故僧都」(188)とある。若紫巻で活躍した北山僧都は、すでに死亡していることが分かる。ここで、僧都に言及したことも、紫上の人生の出発点に読者を引き戻し、紫上の人生を回顧復習させる効果があろう。また、このことは、最大の祈りの師を失った紫上の現在の不安をも示すことになる。

【0103】光源氏の人生の総括(188～9)。今の栄華は過去に例のない程のものである。が、いろいろ悲しい経験もした。「心に飽かずおぼゆること添ひたる身」(189)であったという自己認識。その苦しみの御蔭で今日まで長生きができたのだ。と言って、光源氏は紫上の人生総括に入ってゆく。紫上も、自分と同じように総括すべきであるという発想である。

【0104】光源氏は言う。紫上の人生は、后にも勝る「親の窓のうちながら過ぎたまへるやうなる」人生であったはずだと。深窓の令嬢のような、保護された人生。悲しみは二つだけ。須磨・明石の別れ、女三宮の降嫁。女三宮の一件は、これによってさらに自分の紫上に対する愛を深める結果となった。雨降って地が固まったはずだと光源氏は言いたいらしい。これに対して、紫上は、充分に納得いきかねるという態度を示す。読者もまた、「残り多げなるけはひ、はづかしげなり」(190)という紫上の心情を支持することだろう。

【0105】紫上の出家意識は、本物である。光源氏は、それを許さない。彼は、紫上から取り残されたくない一心で、紫上を自分の世界に引き留めようとしている。「明け暮れの隔てなきうれしさのみこそ、ますことなくおぼゆれ」(190)。そばにいてくれるだけでいい。この思いも、本物だろう。光源氏の淋しさは、ここに極まる。この二人の会話。老夫婦然として、しみじみとした味わいがある。老いては男の方が淋しい。源氏物語においてもこの原則が通用する。老妻・紫上の方は、光源氏の世界に踏みとどまることを、もはや望んでいそうにない。ますます光源氏は淋しい。

【0106】光源氏は、紫上を慰めようと、昔語りをする。どうせ、貴方が一番だという結論の分かっている話である。こんなことで、彼女を慰められると思っていること自体がおかしい。紫上もうんざり、読者もいかにげんにしてほしいと思うはずである。このあたり、光源氏の老いの繰り言、みぐるしい限り。しかし、光源氏としては、ここのところ女三宮に傾いた愛情を本来の路線に修整しようとやっきになっているのである。

【0107】光源氏の葵上論(191)。結論は「思ふにはたのもしく、見るにはわづらはしかりし人さま」。夫婦仲がうまくいかなかったのは、「わがあやまちにのみもあらざりけり」と光源氏は言う。彼は、葵上の心の底の思いを理解していたのだろうか。私は、東宮と結婚すべきであったのだ。が、これも、葵上に借りた紫上

論である。紫上は、葵上のような欠点のない女性であったということを言いたいのである。藤壺を暗々裏に語った帚木巻、雨夜品定め筆法である。

【0108】六条御息所論。これも、新鮮な視点はない。新しくないということは、老いの証明である。「うちとけては見おとさることやなど、あまりつくろひしほどに、やがて隔たりし仲ぞかし」。「世のそしり人の恨みをも」ものかわ、私の中宮に対する世話ぶりを、六条御息所が「かの世ながらも見なほされぬらむ」(192)と考えているところに注目しよう。思えば、秋好中宮を中宮とするのは強引強権の沙汰だった。⇒少女巻【33】。しかし、そんな勝手で光源氏に都合のよい話が通用しない厳然たる事実がまもなく判明する。

【0109】明石御方論。「何ばかりのほどならずとあなづりそめて、心ものに思ひしを、なほ心の底見えず、際なく深きところある人になむ。うはべは人になびき、おいらかに見えながら、うちとけぬけしき下に籠もりて、そこはかなくなはづかしきところこそあれ」(192)。これは、正確な認識と言うべきであろう。結局、明石御方の端倪すべからざる野望、「負けるが勝ち」という高等戦術の妙を暗示する条文である。これを、ライバルであると本人が意識している紫上の面前でやる光源氏も、ちょっと無神経ではある。また、ここで明石御方が、葵上や六条御息所と同列に論じられているところ、明らかに明石御方の格上げである。彼女は、女三宮と同じく、今や紫上に並び、まもなく抜き去りかねない勢いである。「心の底見えず、際なく深き」は、海のイメージ。彼女にふさわしい修辞であろう。紫上も、この光源氏の明石御方批評への返答として、「いとたとしへなきうらなさを」と、海の縁語「うら」で応じている。

【0110】光源氏の紫上評。「人により、ことに従ひ、いとよく二筋に心づかひはしたまひけれ」。「さらに、ここら見れど、御ありさまに似たる人はなかりけり」(193)。予想通りの結果となる。⇒【0106】。光源氏の人生において、紫上以上の女性は出現しなかった。と光源氏は言う。こう言っておいて、その舌の根も乾かぬうちに、女三宮の許に行く。これは何だ。この行為は、これまでの女性論、つまり紫上礼讃を、女三宮の許に行く言い訳にしてしまう結果となる。こう考えると、この女性論の品格の低さは、覆うべくもなからう。

【0111】今日の演奏を褒めてやりたい。これが、光源氏の正直な思いである。よほど弟子の出来ばえが嬉しかったものとみえる。女三宮への思いが、紫上に対する思いを越えた瞬間である。

【0112】光源氏がやってきても、「いといたく若びて、ひとへに御琴に心入れておはす」女三宮。彼女は、琴がうまくなって琴が面白くてしかたないのであろう。今日の出来が会心のものであったと見える。彼女の意識のなかに「われに心おく」紫上は存在しない。彼女は純粹に無邪気にただ嬉しいだけなのである。この純粹さ、無邪気さが人の神経をさかなでするのである。

【0113】女房に昔物語を読ませて、無聊をなぐさめる紫上。彼女が物語らせた物語とは何か。「あだなる男、色好み、二心ある人にかかづらひたる女」(194)の運命を描いた物語である。この物語が何か、もはや考えるまでもなからう。あだなる男、色好み、二心ある人とは、つまり光源氏。その人にかかづらわった女こそ、紫上そのもの。二人が登場し絡み合う物語こそ、『源氏物語』。そして若菜卷そのものではないか。劇の中の劇。源氏物語という虚構のなかの、これは、現実と虚構の接触である。特に、「二心ある人」に注目しようではないか。二心ある人は、まったくもって光源氏以外のなにものでもない。いま女房に読んでもらっている物語のヒロインの人生こそ、自分の人生そのものである、と紫上は認識しているし、読者も、ここでそのように認識させられる。物語の中の物語も源氏物語。源氏物語の二重構造である。この時、読者は一抹の疑念をもつのではないか。紫上の物語は、これから展開される源氏物語とは異質の、古いタイプの物語なのであって、作者が目指そうとしている、これからの物語とは違ったものなのではないか、という疑念である。紫上ファンにとって、これは恐ろしい疑念かもしれない。が、事實はあくまでも冷酷であって、源氏物語は、これ以後、「二心なき愛」の世界へと転進してゆく。この転進を生み出し、二心なき愛を希求する精神を醸成する母胎となった世界こそが、紫上の、古い世界の物語であった。と総括すべきかもしれない。

【0114】昔物語のヒロインは、いろいろ苦勞しても、最後は「よるかた」がある。ここで、紫上と読者の認識は変更されよう。昔物語は源氏物語を離れ、昔物語になる。源氏物語は、源氏物語なのであって、単純な「よるかた」のある昔物語ではない。疑念は消滅し、紫上は昔物語から救いとられる。それがよいか悪いかは、これからの問題である。単純な「よるかた」、源氏物語に即して言えば光源氏ということになろう。この「よるかた」ができたなら、紫上は昔物語の主人公に転落するのみ。という保留条件は、確実にここで成立した。このことのみで、ここは十分と作者は考えているのではあるまいか。が、紫上の「よるかた」は、光源氏ではなく、継子・明石女御であること、すでに予測される路線であろう。

【0115】自分は「あやしく浮きても過ぎしつるありさまかな」(194)と紫上が思った時、光源氏への愛は消滅したと考えるのは考えすぎか。少なくとも、光源氏に対する全面的愛は、今の紫上にはない。全面的愛は、まもなく物怪となって正体を現す六条御息所のものだ。「人の忍びがたく飽かぬことにするもの思ひ離れぬ身にてや止なむとすらむ、あぢきなくもあるかな」(194)。これが、紫上の人生の、本人による総括である。この瞬間、紫上は、特別の人でなくなる。彼女は確かに昔物語の主人公からは脱出したけれども、苦勞の絶えないその他大勢の、現実にくらでもいる女人群、つまり「世の常の人」のなかに吸収されて、ただの三十七歳の普通の女となるのである。これを、紫上最眞の作者がはたして許すや

いなや。

【0116】紫上の発病、そして重態（194～6）。この原因は、もちろん光源氏が女三宮を褒めるために彼女の許に行ったことにある。紫上は、第二位の女になることは、死んでも嫌だったのである。この重態を、どう見るか。紫上の終焉か。あるいは、彼女が復活再生するための儀式か。ここは、須磨・明石、女三宮降嫁、それに次ぐ紫上第三の試練ととらえる必要を感じる。

【0117】紫上発病の報せが、すぐに光源氏のもとに届かず、明石女御の口から間接的に伝わるというところに、紫上の現在がある。

【0118】紫上の病気によって、朱雀院の五十賀が順延になる。女三宮が主催する朱雀院の賀宴を、紫上が身を挺して阻止した。という深層心理的解釈は、この場合まったくの正解であると思う。

【0119】二月すぎ。紫上が二条院へ帰る。転地療法というべきか。本来のポジションへの回帰である。ついに彼女は、六条院の主人公とはならなかった。この後、六条院は誰のものになるか。今は女三宮のものである。彼女が女子を生めば、その子が伝領することになるだろう。

【0120】「この人亡せたまはば、院も、かならず世を背く御本意とげたまひてむ」（196）と夕霧は思う。しかし、これは彼の希望的観測というべきであろう。この段階では、そうなるかどうかはなほだ怪しい、と考えるのが正解というものだろう。しかしながら、光源氏は二条院の紫上の看病につききりであるし、紫上がいなくなった六条院は「火を消ちたるやう」（197）になったところをみると、光源氏の心は、紫上のものであったことが分かるし、六条院の主人公も紫上であったことが、結果として証明されたというべきである。大きく見れば、源氏物語は夕霧の予測通りに進行する。⇒御法・幻巻。

【0121】紫上の出家願望を許さぬ光源氏。「目の前に、わが心とやつし捨てたまはむ御ありさまを見ては、さらに片時堪ふまじく」（197）というのが理由である。この時、光源氏は、まもなく女三宮にそうされる未来を知らない。その時、この時の光源氏の行為が紫上への愛の証明として機能する。近い未来のための、作者の周到な布石・用意である。

【0122】明石女御の看護（197～8）。どうやら紫上の「よるかた」は、光源氏ではなく、明石女御のようである。⇒【0114】。継母の「よるかた」が継子という物語は、昔物語にはない発想である。この発想が、わずかに紫上を昔物語から救いとる。

【0123】若宮を見ての、紫上の言葉。「おとなびたまはむを、え見たてまつらずなりなむこと。忘れたまひなむかし」（198）は、御法巻の泣かせる言葉にまっすぐに接続するものだ。この若宮は、匂宮でないと困る。⇒【91】。

【0124】光源氏の言葉。「心によりてなむ、人はともかくもある。おきて広きうつ

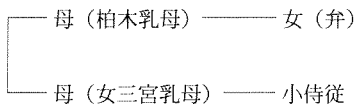
はものには、幸ひそれに従ひ、狭き心ある人は、さるべきにて、高き身となりても、ゆたかにゆるべるかたは後れ、急なる人は、久しく常からず、心ぬるくなだらかなる人は、長き例なむ多かりける」(198)。処世訓に使える名言であろう。「狭き心〜久しく常からず」のところは、まもなく語られる柏木のことを言っているようでもある。

【0125】紫上の病状は、五六日加減のよい日があると、またずっと悪い日が続き、全体に日を追って衰亡してゆく様子であったという。物怪がついている気配はない。

【0126】柏木が登場する。「まことや」という、かつての六条御息所風の語りだしでうかがえるように、彼のことは久しく忘れていた趣がある。そういえば、女三宮の唐猫を抱いて以来の登場である。その後どうなっていたのか。中納言に出世している。帝にも重んじられ、「いと時の人」という状況である。もっとも、この若菜下巻の初めに、夕霧は大納言になっているのだから、柏木の出世は、いかにものろい。光源氏に圧迫されていることが予想される。さらに、柏木は、女三宮の姉である女二宮と結婚している。皇女との結婚は彼の宿願であった。まがりなりにも願望は成就している。が、猫と同じく不満のようである。「人目にとがめらるまじきばかりに、もてなしきこえ」ている。これは、女三宮を得た光源氏の初期、あるいは真木柱と結婚した螢兵部卿と同じであると心得ておけばよい。

【0127】女二宮の母。「下臈の更衣」(199)。これは、夕霧巻まで覚えておく必要がある。女二宮は、したがって皇女とはいえ、柏木のプライドを充たす存在ではなかったのではないかと想像される。彼の祖母、大宮のような存在ではなかったのである。彼の夢は、祖父の夢の実現にある。

【0128】小侍従の紹介。母は女三宮の乳母。その姉が柏木の乳母。ということは、女三宮と柏木とは、実質的に従兄弟感覚である。したがって、かなり以前から、柏木は、誰よりも女三宮に関する情報を受けやすい立場にあった。年とともに、柏木は女三宮に対し、強固なイメージを作っていたのだし、蹴鞠の日以後は、自分の気持ちちを、親しい小侍従のルートを使って女三宮に伝えていたことが分かる。



【0129】女三宮が「人におとられたまふやうにて、一人大殿籠る夜な夜な多く、つれづれにて過ぐしたまふなり」(200)という情報が、朱雀院に奏上されているようであるけれども、この情報は、ちょっと古い。柏木の期待希望の念が古い情報に飛びついたのであろう。それとも、『蜻蛉日記』のごとく「みそかみそよは我が許へ」というように女三宮周辺が思っていて、小侍従がこのような不正確な情報を支持していたのだとすれば、光源氏の心を彼らは理解していないということ

になる。現在は、紫上が重態であるから光源氏は、柏木の期待どおりになっているにすぎない。

【0130】柏木の情報によれば、朱雀院が女二宮を柏木に与えたのは、女三宮を光源氏に与えたことについて後悔しているからだという（200）。ということは、藤大納言をかって嫌った朱雀院の心にも、二心ない結婚への思いがきざしているということだろうか。⇒若菜上巻【43】。しかし、考えてみれば、その柏木こそ、女三宮に対しては二心ない思いをもっている、現在の女二宮にとっては、二心そのものではないか。「それはそれとこそおぼゆる」（201）という柏木の論理は、小侍従の反論をまつまでもなく、矛盾している。ここでも、朱雀院の志は裏切られる。善意の人・朱雀院の発想は、いつも後追い。気の毒なほど「後の祭り」なのである。

【0131】小侍従は、何の遠慮もなく、あけすけな言辞を柏木に弄している。小さいころから、兄妹同然に育ったからだと想像される。

【0132】その当時、貴方が、光源氏と比較の対象になるほどの男であったか。いまでこそ、「すこしものものしく、御衣の色も深くな」（201～2）っているけれども。という小侍従の言葉を聞いていると、過去はともかく、今は、柏木もだいたい光源氏に接近してきていることが分かる。四年間の空白の作用は、柏木にも確実に及んでいるのである。

【0133】女二宮を得ておきながら、さらに女三宮をもという柏木の思念は、小侍従の反論のとおり、尋常の沙汰ではない。彼は何故、それほどまでに女三宮にこだわるのか。皇女との結婚。それも、最高の皇女との結婚でなければ、柏木のプライドは充たされない。彼はそういう男であるらしい。しかし、彼は不正確な情報に踊らされているのであって、女三宮が、彼の期待を充たす存在かということになると、大いに疑問である。柏木の自己完結的悲劇の始まりである。

【0134】「世はいと定めなきものを、女御、后も、あるやうありてもものしたまふたぐひなくやは」という柏木の言葉は、旧秩序を破壊するパーバリアンのそれである。「女御、后も、あるやうありて」については、交野少将か、『伊勢物語』。あるいは、この『源氏物語』に例を求めるしかあるまい。光源氏と藤壺。読者の意識を、光源氏と藤壺の昔に戻す。そうしておいてから、因果は巡る物語に入ってゆこうというのである。さて、光源氏も、その昔、この柏木のように、王命婦をかきくどいたのであろうか。すこし違うのではないか。あれは、世の常ならざる光源氏と藤壺という最高の役者による、きわめて説得力のある不倫展開であった。どうも、あれとこれとは相当に懸隔があるのではないか。柏木の行為は、ほとんど強姦であって、破滅してやむ自暴自棄。異常者、無頼漢の行為に近い、と言えば言い過ぎだろうか。

【0135】小侍従は言う。光源氏と女三宮との夫婦生活は「世の常の御ありさま」

(203)ではない。親が子を慈しむような夫婦関係なのだ。この小侍従の認識は、少し古い、穏当なものだろう。彼女は、朱雀院の願望にかなった生活を女三宮が送っていると強調したかったのである。

【0136】 柏木にしても、光源氏の世界が「世になき御ありさま」(203)であることを承知している。そして自身が比較にもならぬ「あやしきなれ姿」の男であることも。にもかかわらず、彼は運命に突き動かされてゆくのである。情念の鬼は、誰にも止められないということか。

【0137】 結局、しかし、小侍従は、柏木の懇願に負けてしまう。彼女は、主人であり乳姉妹である女三宮より、柏木の方を選択したのである。あるいは、女三宮を自分たちの領分に取り込めようという、おおそれた心理が働いたためかもしれない。「ただ一言、物越にて聞こえ知らずばかりは、何ばかりの御身のやつれにはあらむ。神仏にも思ふこと申すは、罪あるわざかは」(203)という柏木の「いみじき誓言」を信じた小侍従のことを「もの深からぬ若人」(204)と草子地は評している。

【0138】 「近くさぶらふ按察使の君」(205)とある。父親が按察使大納言であった人とみえる。按察使が紫式部時代によく見られる官職であったかどうか調査する必要がある。

【0139】 「四月十余日ばかり」(204)と、作者は月日を記す。葵祭りの頃、御禊の前日。なにかと慌ただしい日である。紫上の発病は、正月二十一日あたりであった。重態のまま「二月も過ぎ」(196)、二条院に移ったわけである。この間、光源氏は紫上につきっきりであった(197)。という事実を明確にしておいて、女三宮懐妊の場面に入ってゆく。若菜巻でとった手法と同じ。女三宮の子供が、光源氏の子供ではありえないことを、読者に明示するためである。

【0140】 小侍従は、柏木を「御帳の東面の御座の端」に導いている。柏木に女三宮の寝顔を見せてやろうということだろう。草子地は言う。「さまでもあるべきことなりや」(205)。いかにも、これはやりすぎである。

【0141】 柏木が女三宮を犯す場面(205~8)。この状況に近い例は、髭黒が玉鬘を犯した事例である。その場面を描かなかったのは、理由あつての省略であったことが、ここで知られよう。また、若菜巻冒頭に、玉鬘を登場させた理由も、ここで納得されよう。また、二心ない夫に嫁した玉鬘の幸せが、微妙な影を落として、このあたりにかぶさってくるのも、凝った構成であると思う。もっとも、この場面が、その昔、光源氏が初めて藤壺の寝所に忍び入った場面の暗示であることは勿論のことであるけれども。

【0142】 女三宮は御帳台で寝ていた。それを、柏木は「床の下に抱きおろし」(205)たという。御帳台のなかに入ってゆかなかったところ、分を心得ているというべきか。床の下という硬い非日常の場面が、彼の行為を野合のイメージと化すといっ

たら言い過ぎか。

【0143】 柏木の口説きは、馴染みのものであるけれども、彼自身の口からあらためて繰り返されてみると、これまで柏木のことは故意としか思われぬほど省略されてきた。その省略の年月の空白の重みが、彼の口説きに迫力を与える結果となっていることに気づく。描かないで描く、作者得意の筆法である。

【0144】 女三宮の「なつかしくらうたげに、やはやはとのみ見えたまふ御けはひの、あてにしみじくおぼゆることぞ、人に似させたまはざりける」(207)という、予想に反した夕顔あるいは朧月夜の雰囲気、柏木の情熱に火をつける結果となったのだと作者は説明している。「いづちもいづちも率て隠したてまつりて、わが身も世に経るさまならず、跡絶えて止みなばや」(207)は、後先のない万歳突撃の思想で、当時の例でいえば、貴族の姫君を略奪する東国野郎、『大和物語』の世界である。もし、柏木の予想どおり、女三宮が「気高うはづかしげ」であったなら、言葉をかわすだけで引き上げようと思っていたとも書いてある。実際、そのようなことは考えにくいけれども、説得力の感じられる一文である。

【0145】 事の終わった後、柏木は少しまどろんでいる。リアルな描写であろう。その時、彼は猫の夢をみる。例の猫が、可愛らしく鳴いてやってくるという夢である。彼は思う。猫を宮に返そうと思って、猫を連れてきたはずだ。なぜ自分は、この猫を彼女に返したのだろうか、と。この時、猫は猫ではなく、猫は何かの象徴となる。猫は、女三宮を柏木に見せ、女三宮のところから柏木のところに来て来る。寝よう寝ようとう鳴いて彼に抱かれ、今また、不思議にも女三宮のところにて、寝よう寝ようとう鳴いて彼のところに擦り寄ってきたのである。柏木は、猫にあやつられているのではないか。彼が交わったのは、女三宮ではなく、猫なのではないか。こういう小説が中国にあるのではないか。調査してみる必要がある。古注は、この夢の中の猫は懷妊の象徴と説く。これも、出典があるはず。調べてみる必要がある。

【0146】 後朝の別れの場面。女三宮をかき抱いて、妻戸まで運ぶ柏木の行為(209)は、御帳台から床に下ろした行為の延長である。遠く、浮舟を小舟に乗せて対岸に連れていった匂宮の行動を連想させる。この乱暴で大胆な行為によって、夕顔や浮舟に似た女三宮の心は、そうとうに柏木に傾くことになるかもしれない。浮舟がそうなるように。

【0147】 柏木は「隅の間の屏風をひき広げ」る。人目に配慮した行為である。彼はこうして、奥を断ち、二人の世界を確保する。「渡殿の南の戸の、昨夜入りしがまだあきながらある」(209)。これも、緊迫感の中の余裕の表現である。作者の実力を感じないか。女三宮が柏木に歌をやる時の心理、「出でなむとするに、すこしなぐさめたまひて」も、同じ余裕である。

【0148】 二人の別れの贈答の場面。「明けぐれ」がキーワードである。四つ使用さ

れている。歌の中に二つ、地の文に二つ。明けぐれの光のなかで、柏木は女三宮の顔を見ようとして、妻戸の外に、抱いて出たのである。女三宮の歌「明けぐれの空に憂き身は消えなむ夢なりけりと見てもやむべく」(210)は傑作であろう。

【0149】この、柏木と女三宮との密会の場面は、ほとんど省略がなく、まるで実況中継の趣がある。この場面のために、源氏物語のこれまでの、これに類したあらゆる場面は省略されているのだと思われるほどである。

【0150】「大殿」に帰った柏木は、「かの猫のありしさま、いと恋しく」(210)思う。いよいよ猫である。⇒【0145】。

【0151】帝の御妻と間違いを犯すより、光源氏の御妻を犯して、光源氏に睨まれることの方が怖いと柏木は思う(211)。まもなく、そういう事態になる。光源氏の、帝以上の権威のほどがしのばれよう。このところ、この光源氏のために、藤原家が陥っている政治的劣勢に照らしてみれば、柏木の心中はよりよく理解できよう。

【0152】とにかくにも、柏木は、昔の光源氏と同じ状況に陥ったのである。これ以後の彼の行動は、かつての光源氏の、その後の行動によって相対化される。光源氏の行動は、いうなれば源氏物語そのものであるから、これ以後の柏木の行為、あるいは運命は、源氏物語の問い直しの意味を常に背負わせられていることとなる。作者の目論見も、そのあたりにあるのではないか。

【0153】女三宮は、その「ひたおもむきにももの懼ぢしたまへる」性格で、発覚する前から発覚した時のように振る舞っている(211~2)。「明かき所にだにえるざり出でたまはず」(212)は、罪人の発想である。藤壺との差に注目していただきたい。女三宮はいかにも頼り無い。これでは柏木も立つ瀬があるまい。

【0154】女三宮の不例を聞き、六条院にやって来た光源氏が弁解する。紫上は今回が最期かもしれない。「いはけなかりしほどよりあつかひそめて、見放ちがたければ、かう月ごろよろづを知らぬさまに過ぎしはべるぞ」(212)。発病以来、光源氏は紫上につきっきりなのである。このことを再度ここで作者は強調している。念のいった処置である。⇒【0139】。

【0155】この事件のバックに葵祭りの雑踏を配している意味はどういうところにあるのであろうか。かつての車争いのイメージ。これは、六条御息所の怨念と葵上の死のイメージに連動する。二つとも、ここでは是非必要なイメージなのではないか。六条御息所は、忘れたころに現れて、紫上を一旦殺す。そのための葵祭。また、葵上の死のイメージは、藤原氏の衰亡没落が、ここに開始するというサインのためなのかもしれない。柏木の破滅は、藤原氏にとって氏の長者候補の喪失という一大事なのだから。さらにいえば、柏木が念願の女三宮に「あふひ」である。

【0156】柏木によれば、女二宮は、女三宮の「落葉」(214)。酷いイメージだが、これより後、彼女は「落葉宮」と呼ばれることになる。

- 【0157】紫上の一旦の死。この引き金をひいたのは、光源氏が自分の許を離れ、六条院の女三宮の許に出掛けたという行為であろう。すでに死にかかっていた紫上にとっては、死ぬことなど、ほんの少しのきっかけさえあれば、それで充分であったのではないか。「なげき」が積もり積もって、最後の「なげき」が、彼女をおしつぶしたのだと解釈すべきであろう。
- 【0158】「御修法どもの壇こぼち」（214）、既にかかなりの僧が辞去していたくらいであるから、紫上の死は、本格的なものであった。光源氏への知らせが、先の場合と同様の事情で、少しおくれたのではないか。⇒【0117】。しかし、紫上を蘇生させたのは、光源氏の實力というべきであろう。光源氏の悲しみの深さに仏が感動したからである、と本文は記す（215）。
- 【0159】不動尊の本誓をもちだし、「頭よりまことに黒煙を立てて」（215）加持祈祷をする験者がある。これが効いたのだとすると、紫上の命はあと半年ということになる。しかし、実際彼女はもっと生きるから、やはりここで蘇生させたのは、光源氏の愛の力だということになろう。
- 【0160】出てきた物怪の台詞。「人は皆去りね。院一所の御耳に聞こえむ」（216）とは懐かしい台詞である。葵上祭りの喧騒は、六条御息所登場のための前奏曲であったことが、いまさらながらに分かる。⇒【0155】。光源氏も、「昔見たまひしものけのさま」であることを確認している。彼女が、紫上に止めを刺せず、こうして正体を現し、紫上を蘇生させてしまったのは、取り乱し身も世もあらぬ光源氏を見るに忍びなかったためである。彼女の中に残っている光源氏への愛執のためであったとある。彼女は成仏していない。この点では藤壺と一緒にある。⇒朝顔巻【63】。六条御息所が現れ、紫上にとりついたのも、女楽の後、光源氏が紫上に彼女の話をしたことに起因する。⇒【0107】。これも、藤壺の場合と同じである。
- 【0161】御息所の霊は、紫上から、側にいる憑人の「童女」（216）に移って叫んでいることが確認される。葵上がそのまま御息所に变化した昔と少しずらしてある。
- 【0162】お前が御息所なら、二人しか知らないことを言ってみよ。という発想、「長恨歌」の終末部分を思わせて、面白い。
- 【0163】御息所は言う。中宮のことは感謝している。しかし、「道異になりぬれば、子の上までも深くおぼえぬにやあらむ」（217）。ここで光源氏の期待は吹っ飛ぶ。彼は、中宮への世話を、六条御息所に対する不実な愛の罪滅ぼしだと認識していた。⇒【0108】。罪滅ぼしの発想など、何の意味もないことがここに明らかになる。それは、単なる気休め。この世の論理なのである。こう言われると、光源氏には打つ手がなくなる。あとは、犯した罪へのおののきが残るばかり。六条御息所登場の意味は、この世の論理を超える論理を示すためにあった、と考えるべきであろう。

- 【0164】死人の悪口を言うな。異界における少しの悲しみが、この世に甚大な被害をもたらすからだ（218）。このことは、『柳穀伝』の銭塘王の怒りなどを参照すれば、よく理解されるところである。あれは、大きな怒りが莫大に拡大される話であつたけれども。
- 【0165】光源氏には守りが強く、近づけない。紫上には怨みはないのだけれども、と御息所は言う。紫上は、やはり北山僧都の死亡が痛手となっている。⇒【0102】。
- 【0166】「修法、読経とののしることも、身には苦しくわびしき炎とのみまつはれて、さらに尊きことも聞こえねば」（218）と御息所は言う。彼女はいま、目蓮尊者の母のような運命、炎の中に逆さまに吊るされているのではないか。これは、鈴虫巻の後半にかかってゆく物語だと思う。⇒鈴虫巻【30】。
- 【0167】六条御息所の、秋好中宮への忠告伝言（218）。1）ゆめ御宮仕へのほどに、人ときしろひ嫉む心つかひたまふな。2）斎宮におはしましころほひの御罪輕むべからむ功德のことを、かならずせさせたまへ。この、御息所の発想によれば、嫉妬するということは往生の妨げになることが了解される。藤壺は弘徽殿と対決したし、六条御息所は葵上と壮絶に戦った。結果はこのていたらく。ということになると、紫上の行く手も樂觀は禁物、ということになろう。そういう雰囲気作りにも、六条御息所の死霊は、一役かっている。
- 【0168】紫上の死は、葵祭りを見物する上達部たちの格好の噂となっていたらしい。「生けるかひありつる幸ひ人」（219）と紫上は言われている。ようやく女三宮の出番が来たのだという世間の誤解は面白い。出番などくるはずもないこと、今は読者のみが知っていることだ。
- 【0169】世間の噂を聞く柏木の感情、「胸うちつぶれて」（219）。見舞いを感謝する光源氏の言葉を聞いた時の柏木の胸の内、「督の君は胸つぶれて」（221）。胸つぶる、の表現は、このような時に使う。藤壺の時、十分に研究したところだ。
- 【0170】柏木、左大弁、藤宰相といった藤原氏の主要メンバーが、祭り見物の帰途、見舞いにやって来る。応対に出た夕霧の涙を見咎めた柏木の思い、「この君の、いとさしも親しからぬ継母の御ことをいたく心しめたまへるかな」（220）は図星である。が、自分の行為が、この夕霧の代行であるという源氏物語の構想からすれば、読者は複雑な感想をもつだろう。本来から言えば、夕霧の紫上に対する不義が、きわめて分かりやすい因果応報の図式なのだけれども、それではいかにも単純で、分かりやすすぎる。また、神聖にして犯すべからざる紫上を、そこまで悲しませる必要は断じてない。であるからして、作者は、柏木の女三宮に対する不義に振ったのである。
- 【0171】この死霊事件に対する光源氏の思い。「女の身は、皆同じ罪深きもとゐぞかし」（221）。これが『源氏物語』の結論なのか。だとすれば、いかにも悲しくやるせない。源氏物語が仏説に取り籠められて終わる印象が強くなるからである。

所詮物語なんて、そんなものかもしれないけれども。

【0172】紫上は、形ばかりの出家を認められる（222）。それというのも、こうすることによって、すこしでも病が回復することもあるのではないかという光源氏の願望から出たもので、本格的な出家ではもちろんない。

【0173】この時の光源氏の憔悴ぶり。「世にかしこくおはする人も、いとかく御心まどふことにあたりては、えしずめたまはぬわざなりけり。いかなるわざをして、これを救ひかけとどめたてまつらむとのみ、夜昼おぼし嘆くに、ほればれしきまで、御顔もすこし面瘦せたまひにたり」（222）。これで、光源氏は紫上のものであったことが証明されたのも同然である。

【0174】六条御息所の死霊を救うために、光源氏は「日ごとに法華經一部づつ供養せさせたまふ」（223）とある。この世の紫上、あの世の六条御息所。二人を救うため、いかに光源氏が必死であったかも分かつ。六条御息所は、やはり一族の人であると考えるべきではないか。紫上と同じように。

【0175】しかし、六条御息所の物怪は、なかなか消滅しなかったらしい。紫上の病状は、夏が最悪であったと記してある（223）。

【0176】紫上は、こういう光源氏の献身に応えようと「思ひ起こして、御湯などいささか参るけにや」六月になるとやや持ち直し、重態から脱す。光源氏の愛を確認し、その愛に応えようとする紫上の意思がポイントである。本人の努力がなければ、病気はなおりはしない。

【0177】さて、この間、光源氏は、紫上につきっきりで、「六条の院には、あからさまにもえわたたまはず」（223）という状態であった。紫上の完勝である。もっとも、女三宮の取り返しのつかない失策がこの間にあったわけであるから、紫上の勝利は地滑りの圧勝といってよい。こういう形で、紫上と女三宮の対決に決着をつけることは、当初からの目論見どおりであったのだろう。問題は、その対決を通して、出てくるもの。そのものが、作者の描く目的であったはずである。いまのところ、出てきたものは、「二心なき愛」である。さて、これからどうなるか。

【0178】女三宮は懷妊する。柏木は、光源氏の留守に、時々夢のような逢瀬をもっている（224）。女三宮は、ひたすらに光源氏を懼じ、光源氏を見慣れた目からは、柏木がうとましいかぎり。しかし、その柏木の子を身籠もってしまったわけである。「あはれなる御宿世ぞありける」と作者は記す。女三宮もまた、柏木と同様、破滅の未来しか残っていそうにない。

【0179】光源氏が、久し振りに六条院へ見舞いにゆくことになる。紫上はだいぶよくなり、髪を洗った彼女が、光源氏と池の蓮を見するという涼しそうな場面（224～6）はよい。髪を洗ったという生活感が、蘇生した紫上の実感となっている。紫上の黒髪は、少女時代から注目されていたが、「まよふ筋もなくて、いときよ

らにゆらゆらとして」(224)、衰えていない。さて、この条だが、光源氏が出掛けたという記事があって、その後に出掛ける前の記事がある。須磨巻の、光源氏出発の場面と同じ構成である。これも、重大局面を意識してのものなのだろうか。

【0180】光源氏が女三宮の許へ見舞いにゆくのは、朱雀院ならびに帝への遠慮のせいである。と、わざわざ断ってある(226)。これも、女三宮にはもはや一時の勢いが全く無くなっていることの表示である。

【0181】懐妊を知らされた光源氏が、「年ごろ経ぬる人々だにさることもなきを、不定なる御ことにもや」(227)と、さしたる感動をしめさず、懐妊そのものの事実関係を疑っているのは、滞標巻で明らかにされた予言で、自分にはもう子供が生まれないことを知っていたからかもしれない。このようなマイナス思考に走ったのも、女三宮に対する思いの減退を証するものであろう。二三日いる間、紫上が気になり「御文をのみ書き尽くしたまふ」(227)というのが現状なのだから。

【0182】柏木が、光源氏が女三宮の所に来たことを知るや、女三宮を取られるのではないかと焦り、女三宮の許に長い手紙を寄越すのは、いかにも愚かである。これではまるで、二人の秘密を見つけてくださいと名乗り出ているようなものではないか。光源氏が、ちょっと席をはずした時に、柏木の文を見せる小侍従も小侍従である。彼女も、柏木と同じように焦り、思慮分別を失っている。

【0183】ひぐらしの効果音は抜群に効いている。ひぐらしは、そのカナカナという甲高い声で、光源氏の眠りを破ったばかりでなく、いよいよ事件の幕を一气呵成に開いたのである。

【0184】光源氏が帰ろうとすると、女三宮が引き止める。彼女が引き止めなければ、事件は起こらなかった。というのは結果論である。しかし、彼女には罪の意識があって、その罪の意識が彼女にこういう行動を取らせたのである。罪を犯した女は、罪を犯す前のように振る舞いたがる。いや、女三宮の幼さを見ると、この行為は、思ったとおりの自然な行為と考えたほうがよいのかもしれない。本文にも「片なりなる御心にまかせて言ひ出でたまへる」(229)とある。彼女は、今のところ、柏木を好いてはいないのだし、光源氏に帰られたら、またしつこい柏木に攻められそうで、本当に不安であったのだ。思わず隠した柏木の手紙は、昼の御座の下にある。女三宮は、この重要な手紙のことを、いつしか忘れていた。なんたる迂闊。なんたる幼さか。

【0185】翌朝早く、光源氏は帰ろうとする。帰心矢の如し。「朝涼みのほどにわたリたまはむ」(229)とある。夏の暑い頃だから、移動は朝早いうちでないとなわかない。こういう描写、非常な生活感に満ちている。さきほどの「ひぐらし」といい、この「朝涼み」といい、日常卑近な事象が、とりかえしのつかない運命の扉を開く。

【0186】昨夜、運命的に落とした「かはほり」を光源氏が捜す。「昨日うたたねしたまへりし御座のあたり」。浅緑の薄様。いよいよ柏木の手紙が発見される。光源氏が、一見して柏木の文だと見破ったのは、かって玉鬘のもとに岩漏中将・柏木が寄越した手紙を念入りに見て、柏木の筆跡を脳裏に焼き付けていたからである。このことは、胡蝶巻に、入念に書いてあった。ようやく、胡蝶巻の描写が生かされる時がきたのである。⇒胡蝶巻【27・30】。

【0187】玉鬘は意外なまでに、この巻の小道具として利用されている。やはり、玉鬘十帖は、若菜を目指した仕事であったのだということが、いまさらながらに了解されるところだ。

【0188】浅緑の薄様を見ている光源氏を、鏡持ちの女房と小侍従が見つける。女房は読むべき文だと思って気にもとめない。小侍従は、紙の色を見、色を失い胸がつぶつぶと鳴る。傍らで、当の女三宮は、ぐっすりと寝ている。壮絶な構図である。

【0189】この時、光源氏は「われならぬ人も見つけたらましかば」(230)と思う。この瞬間から、彼の役目は、秘密を封印する戦略家とならざるをえない。どうやって、秘密を守りとおせるか。これは、しばらくのみものである。

【0190】女三宮と小侍従は、手紙が光源氏に見つけられたことを確認(231～2)する。もはやこれまで、である。小侍従が自分の不用意を棚にあげて、女三宮を責めるのは、乳姉妹の気安さとはいえ、いかにも愚かである。「見しほどに入りたまひしかば、ふともえ置きあへでさしはさみしを、忘れにけり」(231)という女三宮の返事。「忘れにけり」は、光源氏の思い「むげに心にくきところなき御ありさまを、うしろめたしとは見るかし」(230～1)の象徴的言辞であろう。

【0191】光源氏は、念入りに柏木の手紙を点検している(232～3)。もはや疑うところはない。重大な内容を事細かく書き尽くしている。分厚い手紙だからこそ、発見されもしたのである。柏木の不用意さに、失望を覚えつつ、懷妊の意味するところを察知してしまう。この瞬間、光源氏はコキューとなりはてる。で、これから光源氏は、これをどう処置しようとするのか。どう反撃するのか。光源氏の人間性が待った無しに問われる時がきた、と考えるべきであろう。

【0192】柏木の不用意さを語り、自分は人目につく場合も配慮して「こそぞぎつつこそ書きまぎらはししか」(233)と光源氏は思う。須磨から朧月夜におくった手紙の事例などが思い出される。⇒須磨巻 227頁。

【0193】「はじめより心とどめぬ人だに、また異ざまの心わくらむと思ふは、心づきなく思ひ隔てらるる」(233)と光源氏は思う。つい数カ月前まで、光源氏は紫上以上に女三宮を扱っていた。だから、憎しみへの急降下は、想像を絶するというのである。ここで、読者は、光源氏のことを朱雀院以下だと思ふかもしれない。朱雀院は、最愛の朧月夜が光源氏に心を分けているのを承知で愛しつづけた。光

源氏と朧月夜との間には子供は生まれなかったけれども、かりにそうだったとしても、朱雀院は、朧月夜を愛することを止めなかっただろうことは十分に想像できる。このあたりで、読者は、光源氏の人間のスケールを問題としないだろうか。光源氏は今、よくみかける等身大の人間にすぎない。

【0194】「帝の御妻をもあやまつたぐひ、昔もありけれど」(233)と光源氏は思う。そして、その事の起こる理由を述べる(233~5)。これは一般論だけれども、光源氏と藤壺の昔も、こういう事例の一つであったのではないか。ともかく、帝の妻を過つ例は、稀ではない。表沙汰にならぬ限りは、それですんでしまう、とある。歴史書に載っていない歴史的事実に立脚して『源氏物語』は成立している。源氏物語の秘密の、さりげない提示であろう。蜚蜚の物語論の補強である。光源氏と藤壺との関係について、作者は相当の自信があったものと想像される。

【0195】たとえ帝の妻が過ちを犯す場合でも、その相手が、光源氏のような男であれば許される。しかしながら、柏木風情の男に心を許すのはけしからん。と光源氏は考えている。昔なら、読者もそう考えたかもしれない。紅葉賀巻の論理である。しかし、今、この光源氏の論についてゆく読者が何人いるか。笑止だと考える読者が大方だろう。確かに、光源氏が考えたように、妻をなおざりにする男であれば、たとえ帝であってもコキューたらざるをえない。そういう光源氏本人が、いま現に、女三宮にとってそういう男になっているのではないか。このことを、光源氏は頑として認めない。自分は、女三宮の、このうえなくよい夫であると彼は信じきっている。が、はたしてそうか。彼は、女三宮を二心なく愛したか。

【0196】そして、ついに光源氏は思い到る。「故院の上も、かく御心には知ろしめてや、知らず顔つくらせたまひけむ」(235)と。しかし、本文で見えるかぎり、桐壺帝が、光源氏と藤壺の秘密を了解していた節はない。この条、現在の光源氏の心境が言わせた台詞にすぎない。が、この思念は、朱雀院を仮想をする一部の読者の支持を確実に得る思念である。⇒【0193】。作者が、ここで、光源氏にこう思わせたということは、光源氏が、これから、光源氏が今思った桐壺帝と同じように振る舞う可能性を示したことになる。言い換えれば、光源氏の、これ以後の行為は、光源氏が考えた桐壺帝の紅葉賀以降の行為によって、不断に相対化されるということである。はたして、光源氏は父・桐壺帝になりうるか。これを超えるか。それとも、父にはるかに及ばぬ子の運命を生きるのか。これが、当面の問題である。

【0197】「恋の山路は、えもどくまじき」(235)は名言である。恋は理性の通じぬ世界なのだ。孔子も倒れる山路なのである。

【0198】何も知らない紫上は、しきりに女三宮に同情している(235~6)。これは、事情を知っている読者の目には勝利者の余裕に見える。しかし、紫上に即して考えれば、断じてそうではない。光源氏も、女三宮の懷妊について、さりげなく紫

上に語っているけれども、その話題を二人とも、それ以上に拡大しようとしするのは不気味である。光源氏がそうしないのは当然として、紫上の反応の鈍さが気にかかる。彼女、すでに人生を諦めているのではないか。

【0199】光源氏が、女三宮本人より、帝や朱雀院のことを気にしているのは、体裁を繕うことに汲々としている彼の現状の象徴である。そんなことよりも「みづからうめしと思ひきこえたまはむこそ、心苦しからめ」(236)。女三宮本人がどう思うかが問題なのである。紫上にこう言われて、もっともだ自分の考えは浅はかだったと応じる光源氏も情けない。

【0200】光源氏が来ない日々が続く。これが、自分のせいであると自覚する女三宮。そう女三宮に思わせたこと自体、すでに桐壺帝となれない光源氏自身を示している。彼が仮想した父ようになるのは、並大抵のことではない。⇒【0196】。

【0201】小侍従より、秘密の露頭を知らされた柏木の反応。「はづかしく、かたじけなく、かたはらいたきに、朝夕涼みもなきころなれど、身もしむるこちして、いはむかたなくおぼゆ」(237)。これは、桐壺帝に、生まれたばかりの冷泉帝を見せられた時の、光源氏の反応を彷彿させられる記述である。作者も、意識的にやっているものと思われる。⇒紅葉賀巻【43】。

【0202】朝夕も暑い三伏の夏の出来事。これは、かつての光源氏と藤壺の出来事と、わざと季節をだぶらせていることが、いまさらながら確認されよう。運命の子は、冷泉院が生まれた月日に生まれるはずである。かつては簡単に、今回は濃密に描写する。こうすることによって、過去の出来事は、作者によって塗り固められる。かくして、過去の罪は、永遠に消えることなく保存される。

【0203】「あさましくおほけなきものに心おかれたてまつりては、いかでかは目をも見合はせたとまつらむ」(237～8)という柏木の思いは、この巻最後の見せ場、光源氏と柏木の対面の場へと繋がってゆく。

【0204】「さして重き罪には当たるべきならねど」(238)。柏木と女三宮との不義は、さほどの罪ではない。特に、光源氏と藤壺の不義に比較すれば、天地の差があるのだということを、作者は冷静に書いている。光源氏は天皇ではない。不義によって生まれた子が天皇になるのでもない。こういう例は、世間にはザラにある。なのに、柏木は「身のいたづらになりぬるこち」するのである。光源氏が、天皇以上の存在であるからである。少なくとも柏木にとっては。という発想である。柏木の、女三宮をこの上ない女性だと想像した想像力の強さが、いまや光源氏の権威に向いている。女三宮がそうであったように、彼が想像した光源氏の権威とて、彼が想像した通りのものなのか、はなはだ疑問なのに。哀れ柏木は、自分の想像力で自分を殺してゆくことになるのである。

【0205】女三宮の「軽々しさ」を、いまさらに認識する柏木。「しひて、このことを思ひさまたむと思ふかたにて、あながちに難つけたてまつらまほしきにやあら

む」(238)と、草子地はちょっと柏木に同情的である。本心は違うのという語気である。が、自分の罪は棚にあげて、女三宮の不用意を責めようとする柏木の残酷さは、小侍従同様、同情の余地ありやなしや。「あまりひたおもむきにおほどかにあてなる人は、世のありさまも知らず、かつさぶらふ人に心おきたまふこと」(238)がないのだから。という記事を見ると、藤壺もそうだったのかもしれないと読者は思うかもしれない。ならば、女三宮が、これから強い藤壺になる可能性なしとしない。

【0206】光源氏は、女三宮を完全に見限ったわけではない。「あやにくに、憂きにまぎれぬ恋しきの苦しくおぼさる」(239)という心理構造にある。恋しいから憎い。だから、「人目ばかりをめやすくもてな」すしかない。こういう態度を、女三宮は、憎さという表層のみの理解で、対処するほかない。罪の意識がそうさせる。知っているというそぶりを、光源氏が避けようとしているにもかかわらず、女三宮の行為は、光源氏が知っているという前提でとりおこなわれる。光源氏が手を下さなくても、女三宮は自滅してゆくにちがいない。柏木とて同断である。

【0207】女三宮の身の上に起こったことが、女三宮と同じく「はるけどころなくなよびたる」(240)明石女御の身の上にも起こる可能性についての言及がある。この光源氏の想念は、女三宮にとって、ある種の救いだらう。育ちのよい人の陥る弊に、光源氏は思いをはせている。その思いの果てに、藤壺がいると考えてよいはずである。この発想、つきつめてくと、女三宮の不幸も、明石女御の幸せも、みんなたまたまのこと。人生なんて偶然だ、ということになる。

【0208】思えば、雨夜品定において左馬頭が言った女の第一の難点。「なよびかに女しと見れば、あまり情にひきこめられて、とりなせばあだめく」。女三宮の事例を正確に言い当てている。藤壺もそうだった。明石女御とて、例外ではない。

【0209】それにつけても、玉鬘の身の処し方の見事さよ、と光源氏は考える(240～1)。玉鬘物語が、女三宮事件の予行となっていることが、ここで確定したというべきか。⇒【0187】。彼女は、女三宮と同じように、男に踏み込まれながら、自分のせいではないことを示し、許された雰囲気を作りあげて、今は幸せである。こう書いて作者は、女三宮が、玉鬘になる可能性を、ここで否定している。

【0210】女三宮事件に照らして、光源氏が朧月夜の軽薄さにも思い到ったころ、朧月夜が出家したという報告を聞く(241)。彼女の出家は、偶然だが時宜を得たものであったと知れる。これは女三宮事件の余波。女三宮事件は、光源氏の過去の価値を、そうと気付かぬうちに、どんどんと否定してゆく結果となる。

【0211】光源氏と朧月夜との最後の贈答(241～2)。二人にとって、須磨こそ全てという感覚である。須磨で二人は頂点に立ち、後は余生であった。死ぬときが頂点という生き方は、往生人の特権だろう。しかし、この発想、二人にだけ限定できるか。紫上はどうなのだ、という連想はさけれまい。朧月夜の文を、光源氏

が紫上に見せる場面が次にあるのでなおさらである。

【0212】回向の発想がある（241～2）。功德を他に及ぼすという概念である。

【0213】朝顔も出家している模様である（243）。紫上の前で「よそながらのむつびかはしつべき人」が皆、出家していくと語る光源氏。その紫上とて、名目的にしる出家の身なのであってみれば、もはや光源氏の孤独、ここに極まった感が深い。彼の周りには誰もいないではないか。花散里はどうしたか。明石御方は。

【0214】朝顔の総括。「なほここの人のありさまを聞き見るなかに、深く思ふさまに、さすがになつかしきことの、かの人の御なずらひにだにあらざりけるかな」（243）。精神的愛を全うした人物が一番評価されるということは、光源氏的世界の否定にほかならない。

【0215】女子教育の困難さ。「宿世などいふらむものは、目に見えぬわざにて、親の心にまかせがたし」（243）。教育は、人為を超える偶然の世界だということか。といっても、幼年期の教育をないがしろにせよといっているのではない。「生ひ立たむほどの心つかひは、なほ力入るべかめり」（243）。

【0216】光源氏の命令で、朧月夜の尼装束の世話をする紫上。出家願望の強い紫上に対する光源氏のやり方は、少し無神経ではないか。

【0217】花散里は健在である。朧月夜の尼装束を「六条の東の君」にも依頼している記事がある。

【0218】朱雀院の御賀の延引。紫上の発病で、当初の予定はついていた。⇒

【0118】。今回の原因は、明らかに女三宮事件であって、光源氏本人が、朱雀院の御賀を催す心境にないということが原因である。葵上の忌月（八月）、弘徽殿大後の忌月（九月）など、表面を取り繕う事柄にすぎない。十月の予定が、女三宮の不調のために、また延びる。こう順延が続くと、祝意は萎える。女楽の腕も鈍っていることだろう。朱雀院には気の毒な話である。善意の人・朱雀院、果たしてこの事態にどのように反応するか。興味深い。

【0219】女二宮。「衛門の督の御あづかりの宮」と呼ばれている。

【0220】女二宮主催の朱雀院五十賀（245）が、十月に行われている。藤原氏あげての盛儀であつたらしい。本文は、これについて多くを語らない。夫である柏木も病をおして出席している。

【0221】朱雀院は、女三宮事件を、世の噂、状況からある程度推察している（246）。「内裏わたりなどの、みやびをかはず仲らひなどにも、けしからず憂きこと言ひ出づるたぐひも聞こゆかし」（246）と、女御更衣の不行跡から女三宮の不貞を類推さえている。が、何事があるにせよ、彼は、断然女三宮の味方である。「なほこの道は離れがたくて」（247）。親が子を思う愛。盲目の愛。出家にもあるまじき愛。この悲しい愛を作者は否定していない。否定しないどころか、これ以外信じられぬという道を、女三宮事件でもってつけてしまった、というべきだろう。

恩愛のテーマである。

【0222】朱雀院は、女三宮に手紙を送る。「世の中さびしく思はずなることありとも、忍びて過ごしたまへ。うらめしげなるけしきなど、おぼろけにて、見知り顔にほめかす、いと品おくれたるわざになむ」(247) というアドバイスを与える。お前に罪はない。非は光源氏にある。が、ここは我慢が肝心、という常識的発想である。これでは、光源氏も立つ瀬がなかろうし、女三宮も救われまい。光源氏に見られる可能性のある手紙では、これが限界というものだろう。しかし、これで事はおさまるはずがない。これは、次なる行為の一步にすぎない。

【0223】光源氏が朱雀院からの手紙を見て、朱雀院は「うちうちのあさましき」(247) を知らないのだと判断する。この光源氏の認識は甘い。⇒【0221】。そして、この手紙を梃子にして、朱雀院を悲しませている現状をあれやこれやと説明し、じわじわと女三宮の罪の周辺を責める場面(248～50)。近い将来起こる、柏木に酒をすすめる有名な場面の、これは予行であろう。あそこでもそうであったが、ここでも、自分の老人意識を露骨に表白している。「さだ過ぎ人」(248)「うたて翁」(250)だ。人は、自分が老人だと言った時から老人なのだ。本人は、そういう意味でいわなくても。

【0224】「この世はいとやすし。ことにあらず」(249)と光源氏は女三宮に言う。宇治八宮の最後の台詞に似ている。しかし、光源氏のこの言葉は、いかにもわざとらしい言い方である。俺は、例の一件は全部知っているのだぞと、すごんでいるにすぎないではないか。おためごかしに、硯を引き寄せ、墨まですり、紙を用意してやったとて、これで女三宮が朱雀院に返事が書けるものか。この時、傍らにいて、柏木にはすらすらと文を書く女三宮の姿を想像する光源氏の姿は、老醜というべきであろう。ここまで落ちたか光源氏よ。という印象が強い。

【0225】しかし、朱雀院の五十賀の順延(250～1)は、ただごとではない。藤原氏側のあげての盛儀に比べ、光源氏方のこの態度は、五十賀を嫌がっているとみられてもいたしたかならう。本文には描かれていないが、世間ではさまざまな揣摩憶測がなされていたであろうことは十分に想像できる。光源氏は、女三宮方の誰かが朱雀院に注進したために、このような御不満の手紙が届いたのだと考えているけれども、その認識も、浮世離れしているといわざるをえない。この政治的勘の消滅、自分を殺せぬ处世こそ、光源氏の老人性にほかなるまい。彼の態度は、十分に女三宮を傷つけているし、朱雀院へは耐えがたい屈辱感を与えている。まして柏木には、殺傷的影響力をふるって、来るべき対面の日の一言など、止めの一撃にすぎない。これら一連の行為を光源氏が意識し計算し政治的に行っているとは、到底信じることはできない。したがって、客観的にみて、今は光源氏の幻影が独り歩きしていて、その幻影が猛威をふるっている段階である。ならば、光源氏の終末は近い。幻影などというものは、早晩かならず破れ消え去るものだ

から。

【0226】朱雀院の五十賀は、桐壺院の忌月という理由で十一月も見送られ、結局、もはや後のない十二月ということになる（250）。いやいやしぶしぶの御義理立て、という印象は隠しようがない。

【0227】ここらで、冷静に考えてほしい。女三宮は懷妊中である。十二月に朱雀院に参上して五十賀をするらしいが、彼女の身体は大丈夫なのか。藤壺の例に照らして言えば、十月には出産準備のために里に下がる必要がある。藤壺の場合は、二ヵ月のサバ読みがあったのであるけれども、女三宮は正味の話である。出産二ヵ月前に、こういう行事を主催させる光源氏の神経には、恐れ入るばかりではないか。

【0228】朱雀院の賀の延引と同時に、柏木も六条院に呼ばれていない。世間は、この事実を、柏木の病気と、六条院で遊びがないせいだと考え納得している。が、夕霧は何かあると考えている（251）。秘密は近くから露頭してゆくという鉄則どおりの展開であろう。

【0229】夕霧は思う。「すきものは、わがけしきとりしことには忍ばぬにやありけむ」（251）。しかし、ここまで事態が深刻化しているとは想像の外であった。ここで、夕霧が「すきもの」でないことが、自ずから確認されよう。紫上は、この先安全に推移するということを、作者がさりげなく言っているものとみたい。

【0230】朱雀院の五十賀は、十二月十余日と決定する。予定では二月十余日であったのだから、ちょうど十ヵ月の順延である。⇒【71】。

【0231】いよいよ試案である。「殿のうちゆすりでののしる」（252）。光源氏も決して手を抜いたわけではない。紫上も六条院へ久し振りに帰還する。明石女御も出産を終え、里にいる。玉鬘が参加しているのが新しい点である。これは、本番の時に明らかになることだが、髭黒と光源氏との関係の親密さを示す意味があらう。花散里は、試案の試案を夕霧が彼女の丑寅町で行っていたから、御前の試案には参加していない。明石御方がどうしていたか、記述がない。

【0232】柏木が試案に招かれる。一度は辞退したが、再度の要請があったこと、父の致仕の太政大臣の勧めに、わりなく病をおしてやって来る。光源氏と久し振りの会話。両者、充分に事態を了解したうえでのやりとり。スリリングである。言いたいことを一言も言わぬ会話。なかなか読ませる部分である（253～6）。このまま済んでいれば、光源氏は桐壺帝になれたのだが。

【0233】光源氏と柏木が、最初に言葉を交わしたのは「まだ上達部などもつどひたまはぬほど」（253）である。この時、光源氏は皮肉を飛ばさない。その時ではないと心得ているのである。悪辣というべきか。堪え性がないというべきか。

【0234】柏木は言う。春の頃から、持病の「乱り脚病」が悪化して「はかばかしく踏み立つこともはべらず」（254）と。既に露頭していることなのに、夏のアリ

パイを主張してどうするのか。柏木は光源氏も確信してはいないのだ、と淡い期待を抱いているのである。あるいは、取り返すことのできない過去の修整願望を口にただけなのかもしれない。あわれである。

【0235】専門家の狭さ。「ものの師などいふものは、ただわが立てたることこそあれ、いとくちをしきものなり」(256)。思えば、スペシャリストよりゼネラリスト、という発想は、光源氏の一貫した教育方針であった。

【0236】柏木が、音楽の監修に当たる場面(256)。先頃すませたばかりの、女二宮主催になる五十賀が、この日の予行演習となっているのであろう。この日この時が、彼の人生、最後の栄光の時である。

【0237】試楽の主賓席および演奏者に注目したい。光源氏の側に、髭黒と紫上の父・式部卿宮。童舞をする者を言えば、髭黒の三郎・四郎。これは玉鬘腹。夕霧の次郎・三郎。腹はそれぞれ典侍と雲居雁。蛸兵部卿の孫王。式部卿の孫、父は源中納言。これらが、光源氏の勢力の全容であろう。髭黒と玉鬘が、がっちりと組み込まれている点に注目しよう。このなかで、柏木だけが異質。そもそも彼は呼ばれる必要などなかったのではないか。柏木は藤原氏正統の嫡子である。その彼が、光源氏方の音楽を監修している。いかにも軽い扱いである。藤原氏など入り込む余地のない、圧倒的な源氏時代の、これは象徴的風景ではないか。

【0238】上達部もなにもかも、皆そろった席で、最も効果的な時を選んで、光源氏は、舞を見るのも大儀なような柏木に言う。「過ぐる齢に添へては、酔ひ泣きこそとどめがたきわざなりけれ。衛門の督心とどめてほほゑまる、いと心はづかしや。さりともしばしならむ。さかさまに行かぬ年月よ。老いはえのがれぬわざなり」(258)と。そして、嫌がる柏木に酒を強いる。あまりに有名な場面。若菜巻のハイライトは、こうして突然やってくる。光源氏は、ついに言ってしまったのだ。言った彼は、万座のなかで一挙に老人になる。⇒【0223】。上達部たちが全員笑って、光源氏の冗談に満足したとしても、読者は決してそうしない。これは冗談でもなんでもなく、光源氏の心からの叫びなのだ。「さかさまに行かぬ年月よ」は、いうなれば、玉手箱をあけた浦島の台詞であろう。六条院という巨大な装置は、光源氏の時間を止める玉手箱であったことが、この瞬間に判明する。時間の意識を喪失させる神仙境、それが六条院であったのだ。思いおこせば、この装置の蓋は、光源氏の四十の賀という、取り返しのつかない「老いらくの来る」時間を告げた若菜巻の開始とともに、ギシギシと音をたてて開きはじめ、ついにここ、巻末に来て、ようやく開ききった感が深い。源氏物語の一分を占める巨大な若菜巻は、この絶対秘密の箱を開けてみせる巻なのである。開けた結果、どうなったか。光源氏がただの老人になった。これのみ、である。

【0239】しかし、光源氏は、だだで老人となったわけではない。柏木の死、まだ死んでいないが間もなく死ぬ柏木の死と引換えに老人となった。彼は、につっき柏

木に止めを確かに刺した。が、柏木によって逆に止めをも刺された。壮絶な相打ちというべきではないか。相手が、光源氏相応の相手であったかどうか。それはこの際問題にすべきではないかもしれない。えてして世代交代というものは、不足な相手によって行われるものなのである。それが、世の冷たさなのだ。と、作者は言いたかったのかもしれない。

【0240】その柏木が、妻と母との綱引きの結果、妻である女二宮の許ではなく、母の許で死の床に就くという設定も重要であろう。恩愛。親が子愛する盲目の愛。「人の親の心は闇にあらねども子を思う道にまどひぬるかな」。その母の愛に身をゆだねる柏木。これは、光源氏より朱雀院を選ぶ、近い未来の女三宮の行為と響き合う設定である。こうなると、夫婦とは一体何なのだ、という問題が浮上してくる。その問題の極北には、紫上がいる。

【0241】女二宮は、柏木の家における、女三宮なのだ。彼女の悲運は、光源氏の家における女三宮の悲運に連動し、増幅される。

【0242】次第に弱ってゆく柏木。帝、朱雀院、そして光源氏、夕霧からの見舞い(262)。このまま作者は彼を見殺しにするのであろうか。

【0243】女三宮主催になる朱雀院五十賀は、結局また十日ぐらい順延して、十二月二十五日に行われた。柏木の病気が、晴れの場の空気を重いものとし、盛り上がることもなく「ものすさまじきやう」(263)な雰囲気であったと想像される。その本文は、わずか六行にすぎない。

【0244】「摩訶毘盧遮那の」という切り裂いたような終わり方も、なにやら意味ありげであるが、この巻全体の鎮魂のための呪文めいて面白いと思う。『三宝絵』上に言う。「暫くも心を至し一度も名を唱ふるに、罪を滅し願ひを満て給ふ事、(仏が)い坐しし時に異ならぬをや」。

注 源氏物語本文は、新潮日本古典集成『源氏物語 五』(石田穰二 清水好子校注)に依った。括弧内の数字は、その所在ページである。